
龍と書いてなんと呼ぶ？ ～他多数～

雨月

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

龍と書いてなんと呼ぶ？ ～他多数～

【コード】

N2523B

【作者名】

雨月

【あらすじ】

とある、少年の非日常の色々な物語

龍と書いてなんと呼ぶ？ ～他多数～

股、始まる物語

「いままで、いることにさえ気がついてもらえなかった私に初めて
きがついてくれた彼は死んでしまったのです。あれから、三ヶ月・
・ちよつとスケベなあのは・・・天国に逝けたのでしょうか？」

龍と書いてなんと呼ぶ？

「輝、少しは腕を上げたな？」

「ああ、まあ、それなりに頑張つてたからな。ま、あれだけ頑張れば・・・ちよつとは俺も強くなるよ。」

「おじいちゃん、おにいちゃん、ご飯が出来たよ？」

「一見すると、とても仲がよい孫と祖父。・・・まあ、今のところはそれであつてるのだが、他の家族とちよつと違うところがある。そう、この中で生きている奴は一人もいない。」

俺の名前は白川しらかわ輝あきら。

実の祖母に事故？で殺されてしまい、スケベ爺ととても素直な妹と一緒に天国でも地獄でもないところで生活している。俺としてはまだ、やりたいことがたくさんあるのだが・・・死んでしまい、どうすることも出来なかった。お先真つ暗で終わってしまった俺の人生だが、爺さんがどうにかして俺を復活させるために努力してくれた。無論、爺さんのライバル（ばあちゃん）をたおすために・・・

「輝、あれから・・・数ヶ月。ようやくお前を現世に戻す方法を

思い出したぞ。」

飯を食いながら新聞にエロ本を隠しながら見ている爺さんは唐突にそう告げた。うーん、どうやったたら菜々美に気取られずにあんな感じで見る事が出来るんだ？ちなみに、俺の妹の名前は菜々美という。この妹も、洒落にならんぐらい力が強く、爺さんがふざけたりすると問答無用で鬼になる。

「・・・おじいちゃん、そんなのご飯食べるときに読まないで！」

菜々美よ、そういうものは爺さんの頭を思いつき蹴った後ではなく、前に言うもんだろう？見る、爺さんが脳震盪をおこしてるじゃないか・・・。だが、このくらいではあの爺さんは死なない。いや、もとから死んでるが・・・とりあえず、死なないだろう。

「・・・とりあえず輝・・・食べ終わったらわしの像があるところまで来なさい。そこで話の続きはしよう。ここにはゆっくりと素晴らしい本が見られないからな。」

そついうと爺さんはすたころと走り去っていった。俺と菜々美はため息をつき互いに顔を見合わせる。菜々美の顔は少し暗かった。

「・・・お兄ちゃん、お別れだね？」

「ああ、今まで世話してくれてありがとな。また、死んだときは会いにくるからな。成仏すんなよ？」

「うん！待ってるよ！！」

俺は立ち上がり、自分の妹の頭をなでた。もう、こんなことをす

る歳ではないが、生きているときに出来なかったものでしてあげてもいいだろう。はじめに言うておくが、俺は家族思いであって、シスコンではない!!」

「このシスコン兄貴い。菜々美タンに骨も魂もぬかれおって！」

「うっせい、爺さん!!」

俺は顔を出して叫んでいる爺さんに走って追いつき、華麗な蹴りをお見舞いしてやった。

そして、爺さんの像があるところに二人でやってきた。

菜々美は俺と別れるのが嫌らしく、部屋に引きこもってしまった。さて、それはそれでいいとして、今日もまた、爺さんの像のポーズが変わっている。今日はどこぞの変身ヒーローの変身するときのポーズか・・・確か昨日はマッスルボディーを強調したポーズだったかな？あれは正直、夢に出てきておぞましかったな。

「・・・さて、これからお前を現世に飛ばすのだが・・・ときに輝よ。」

「なんだ、爺さん？」

「最後にお前に渡すものがある。これを持っていけ。これがお前を守ってくれるに違いない。」

渡されたものは・・・いろいろと難しい文字の彫ってある木刀であった。なんか、触っているだけで背筋がぞくりとする感じた。

「輝、この門をくぐるのじゃ。本当は、菜々美が大きくなってから

使つつもりじゃったのだが・・・まあ、さすればお前は現世に戻ることが出来る。しかし、どうなるかはわからん。」

爺さんが指差したほうには、爺さんの像が股を開いて待っていた。ぐ、なんかすんごい生き返りたくなかったなあ。股ぐりたくねえ。門か、これ？

「・・・輝、早くいかんか！」

「え、だつてよぉ、こんなのいけるかよ・・・」

一応、抵抗はしておいたが爺さんはニヤニヤしているようだ。・・・せめて、爺さんの股をくぐる前にしておきたいことがある！！

「爺さん、今まで菜々美に悪戯してきたぶんだ！受けとれえええ！！」

俺は持っている木刀を思いっきり爺さんの股にぶつけた。不意を疲れた爺さんは避けることができず、俺の攻撃で床に沈む。そして俺は爺さんの股をくぐったのであった。

「ぐおおおお・・・輝め・・・やるようになったの・・・それに、まだあいつに言わないといけないことがあったのじゃが・・・自業自得じゃ。」

股をくぐった俺は、とある場所に着陸！！ではなく、着水した。

ばしゃーん！！

「ぶはああああ！！！」

俺はとりあえず岸に向かって泳ぎ・・・途中でおぼれ始めた。みんな、川に服を着たまんまでおよいじゃ駄目だぞ？溺れてしまうからな・・・俺のように。

く、このままでは再び爺さんのもとに戻ってしまう。何故だか・・・泳ぎづらい。服を着ているからではないようだ。

俺は、溺れながらも自分の姿を確認してみた。

白銀に輝く体・・・鋭く尖った爪・・・長く伸びた尻尾・・・そして、顔から伸びている二本の白い線。

どうやら、俺は今、龍になっているようだ。ははは・・・どうなってるんだこりゃ？とりあえず、俺は溺れながらも岸に這い上がるこゝとが出来た。さて、これからどうなることやら？

股、始まる物語（後書き）

ええと、どうも、久しぶりです。これからもよろしくお願いしますね？

龍と書いてなんと呼ぶ？ ~他多数~

犯罪防止運動

二、

私に優しくしてくれたあいつはもう、死んでしまった。あの時、私がつめればよかったのだが、できなかつた。いまさら、どうしようもないと分かっているが、そのことを考えると心が沈んでしまう。・・本当に、あのスケベな男は死んでしまったのだ。

私にとって、弟のようだったあの少年は死んでしまった。面白い性格で、かなりの無茶をするような子でもあったが、ちよつとスケベであった。私としては、もうちよつと彼の成長を見ていたかったものだ。もしかしたら地獄にいつてる可能性もあるが、彼なら頑張れるだろう。

「があああつあ．．．」

ああ、疲れたあ。てか、死に掛けたあ。復活早々、ほんとに死に掛けたよ。しかし、こんな体じゃ、人前にも出られないね。どうしたもんかなあ．．．。

とりあえず俺は、自宅に帰ることにした。だが、先ほども思った通り．．．この姿で道を歩いていたら動物園か謎の研究所に送り込まれるだろう．．．さて、困った．．．とりあえず、人通りのめつぽう少ないこの大きな橋の下で生活していれば大丈夫だ。

そこは、俺が葵と出会った場所でもあった。そう、ここが俺の高校生活の中で一番、驚いた場所だ。あれから結構死んだほうだし．．．今では人間の形すらしていない。ちなみに、葵というのは俺と一緒に住んでいた龍だ。他にも龍はいた。

ぐうううううう．．．

腹も減ったし・・・何か食べたいなあ・・・あの時は確か、俺が葵にパンをあげたんだっけ？はじめは食われると思ったけどなあ・・・でも、龍って何を食べるんだ？ザリガニ？そんなことを考えていると、誰かが向こうからやってきた。やばいやばい！！動かなければいけないだろうが・・・もしかしたら気がつかれるかもしれない。

「・・・おら、黙りやがれ！！」

「むぐううう！！」

隠れようとしていた俺にそんな声が聞こえる。どうやら、誘拐のようだ、俺が過去にあった中で一番怖いいつかのおじさんよりはましな顔をしているが、今度は間違いなく、誘拐だ！！くそ！！どうすればいいんだ！！この姿で出たら大変じゃないか？

俺が迷っている間に、その男は男の子を車に押し込めようとしている。

近所だから知っているが、この時間帯から後はなかなか人が通らない。

つまり、この現場を見ているのは俺だけかもしれないのだ。

俺は、意を決して橋の影から飛び出る。

そのまま飛び・・・って、俺って空とべたのね？しらなかつたあ。

ま、おれはそのまま、背後から男に襲いかかる！！そして、男の首根っこを口でくわえるとそのまま川に放り投げた。すごい高さまで上昇すると、そのまま男は打ち上げるのをしくじったような花火のごとく、川に向かってスピードを上げる。

「ぐあああ！！」

男はそのまま川にドボン！はっはっはっは！！さっきまで溺れていた自分とそっくりだ。みんな、人を川に落とすしちや駄目だよ？お兄さんとの約束だ。

俺は男が戻ってくる前に、男の子を縛っていたロープを引きちぎる。男の子は珍しいものでも見るような感じで俺を見ている。そりゃそうだ、龍は珍しいだろうな。

「あ、あの・・・助けてくれてありがとう！」

「ぐしゃあああ。」

く、男の子が言っていることは分かるのに、俺はほとんど喋れてねえ。もう一度、ひらがなから勉強するかな？いや、発音からはじめたほうがいいのかもしれん。

「あの、僕・・・今日のことは忘れないよ！！！」

男の子はそういうと走っていった。

うん、元気なのはいいことだが・・・あまり無茶なことはするなよ？で、俺はようやく上がってきた誘拐犯を長い体で縛り上げ気絶させると、警察の前においてきた。それだけでは分からないと思っただが・・・なんと、警察にちょうどあの男の子が来ていたのだ。

俺はそのまま姿をくramsすために空を飛ぶことにした。しかし・・・これからどうしようか？この長い体を生かして、うなぎとして生活していこうか？いや、とりあえず、人間に戻る方法を見つけよう。俺はこれ以上人に見られないためにもとある場所にやってきた。

そこは、俺が加奈と出会った場所で、もう少し下のほうで碧さんと出会った場所に行くことができる。

加奈と碧さんと言うのも龍だ。

加奈は少々、いや、かなり強情なところもあったが、面白い奴だっ

た。

碧さんは物腰やわらかな大人の女性といった感じの人だったが、どこか抜けていた。俺が今、身を潜めているところは黒くなった大きな木だ。これは、加奈と出会った時に加奈がこの木を大きな木炭に変えてしまった。ま、今ではいい思い出だ。しかし・・・困ったものだな。会いに行こうとしても、こんな姿だからなあ。よし、夜になつて会いに行くか！

こつ、こつ、こつ・・・

どうやら、誰かがやってきたようだ。誰かを引きずっっているようでもある。

「・・・よし、ここなら誰も来ないで楽しめるだろう・・・ぐふふふ。」

「むー！んー！！」

そいつは、ロープで縛った女の子を連れてきて何かをしようとしている。

・・・いつの間に、俺の住んでいる町は犯罪の多い町になってんだ？・・・悪い子にはお仕置きしなくては！！とりあえず、この悪人に責任とつてもらおうとするかな？俺は音もなく忍びより、今にも女の子を抱きつこうとしている変体さんの後ろに回りこむ。そして、ここでも長い体を生かして、奴の首に巻きつけて先ほどまでいた大きな木に思いつきりぶつける。ちなみに俺は悪いやつには手加減しない派だ。

ぼきいいい！！

「ぐああっあああ！！」

そのまま、男は動かなくなり・・・いや、殺してないよ？ただ気絶させたただだからね。まあ、なんにせよ・・・これで二人目に姿を確認されてしまった。明日の朝刊にUMA扱いで新聞に出ることがあるかもしれない・・・。

ロープで縛られている女の子を助けてあげた。女の子は俺を恐怖の入り混じった感じの視線で俺を見た。

「へ、蛇？」

ああ、いつかの俺みたいだ・・・ということ、俺は首をおもいきり振ることにした。

「私を助けてくれたの？」

頷く。そして俺は、女の子からさっさと離れてほとんど暗くなつた山道を飛び始めた。今気がついたのだが、この姿なら道に迷つても空を飛んで確認することが出来る。しかしまあ、葵たちが龍だったときに一度も空を飛んでいるところを見たことがなかったから龍はてっきり空を飛べないと思つてたよ。

俺は、そんなことを考えながら自宅へと向かって飛んでいくことにした。

ばあばあ！ばあちゃん！

三、

夜に飛べば姿が消せると思ったが間違いだった。俺の体は白銀に輝いており、少しの光で強烈な光を辺りに振りまいている。これだつたら月明かりの光だけで、勉強が出来るに違いない、無論、蛍の光でもオーケーだ。

誰にも気づかれることなく、自宅の近くまでやってくることが出来た。はあ、かなりの時間が経ってしまった。さて、これからどうしようか？

「……ほお、ようやく戻ってきたか、輝。」

「こ、この声は……俺を殺した人物だ。つーことはばあちゃんか？くそ！！この俺の姿を一発で見破るなんて……あんた人間か？

「……かわいそうに……そんな姿になってしまったのう。」

一見、とても哀れんでいるように見える。

いや、確かに哀れんでいるのだが、何故だかこの先俺の身にどのようなことが起きるか簡単に想像できた。俺のばあちゃんは確かに優しい……だが、それは武士の情け！苦しんでいる相手がいたら問答無用で崖につかまっているのなら、落として楽にしてあげるし、元、人間だった連中を今度、人間に生まれ変われるようにあの世に送るのだ。

「……今度こそ、天国に送ってやろう。」

「ぎしややや！！」

や、やられてたまるか！！今度こそ絶対にばあちゃんを倒してみせる！！いや、倒せなかつたら再び死んでしまう！！

俺はばあちゃんに襲い掛かった！！だが、顎、胸、股間を瞬く間に突かれ・・・家の玄関に叩きつけられた。・・・ああ、もう駄目。てか、前より数倍強くなってんじゃない？

「・・・輝、強くなれ。ばあちゃんは旅に出るからね。」

「・・・ま、待って・・・ばあちゃん・・・。」

ばあちゃんは俺の視界から消えた。

ああ、今回は殺されなくて良かったけど・・・爺さん、負けてしまったよ。

所詮、俺は孫だったよ。生きてきた年数が違う。・・・あれ？確か爺さんは98ぐらいで死んだって思うけど・・・聞いた話じゃ、ばあちゃんは爺さんの年上だったって言ってたぞ？いつたい、俺のばあちゃんは何歳？と、そんなことを考えていた俺の意識は黒い幕で覆われたのであった。ちゃんちゃん！！

日の光が俺の顔にあたり俺は目を覚まして辺りを見回す。ここは、どこだ？真っ白な壁、真っ白なベッド。どうやらここは病院のようだ。あれ、何で俺は病院にいるんだ？いつたい、何があったんだ？自分の体を見渡す。体中に包帯が巻かれていてまるで、ミイラ男だ。

「・・・なんでこんなところに寝てんだ？」

考えてみた。……あ、そうだ！！思い出した！！俺は確か、土手を帰っていたら蛇のような生物に出会って……。・（中略）・……で、確か、龍になって家に帰ろうとして……。あれ？全く思い出せない？あいてて……。しかも思い出そうとしたら頭が痛い！？

「……く、ナースコール！！カモン、看護婦さん！！」

俺はナースコールを押して気を失った。最後に聞こえてきたのは懐かしい、誰かの声であった。

次に目を覚ましたのは自宅の元、自分の部屋だった。どうやら、ベッドに寝かされているようだ。

「あ、目を覚ましました！！」

「……葵？」

と、いきなり葵が俺に飛びついてきた。く、食われる？

「……心配したんですよ？」

「あ、すまん。ところで……。なんでここにいるんだ？」

ここにいたのは、葵、おばさん、加奈、碧さん……。あれ？

「……穂乃香ちゃんは？」

「穂乃香ちゃん？誰ですか、それ……。」

俺は、皆に穂乃香ちゃんの説明をしたが誰も覚えていなかった。？どうなってんだ。ま、それは後で調べるとして……。

「いったい、俺は病院で何をしていたんだ？」

その後、簡潔に加奈に説明してもらった。

いや、何で加奈が説明するんだ？説明するなら碧さんとかの方が得意そうだが？まあ、それはおいておくとして……加奈の説明によるとこうなる。

俺が死んで、三ヶ月。

そして、発見されて一週間。

その間俺はどうやら気を失っていたらしい。

そのときの描写は凄い。

どうやら俺は自宅の玄関の前で血まみれで倒れており、瀕死の状態だったそうだ。

あたりには鴉が寄ってきていたらしい……。それで、朝一番に気がついたのは新聞屋さんで、急いで警察と救急車を呼んだそうだ。

そして、俺が死んだことを知った彼ら青ざめた。

そりゃそうだ、事実、俺は死んでいるからな。さて、驚いた警察は家に住んでいた全員を捕まえ、色々聞いたらしい。だが、葬たちも驚いていたので全く事件に進展はなかった……。結果、俺はとりあえず生きているのでこれで良しといった感じになっただらしい……。いや、一応警察が俺のことを呼んでいるらしいが？

「まあ、生き返れてよかった良かった。」

「良くないです……！」

「そつよ……！」

「そっだよ!!」

はあ、やれやれ。ま、これで何とか丸く収まるかもしれない。だが、俺の幼馴染はどこに行ったんだ？なぜ、誰も覚えていないのだろうか？

「さて、とりあえずはこれでいいとして、輝。」

「なんですか？」

「お前、まだやってないことがあるだろう？」

なんかあったかな？……………ああ、思い出した。

「……………わかりました。明日の学校終わってから行ってきますよ。」

しかし、あたりの皆は笑っていた。なぜだ？間違ってたか？あ、今はどうやら夏休みらしい……………。なんか、騙された気分だ。

赤い巨星の……

四、

俺が復活して、少し経った。体も今のところ順調です。心配してくださった皆様、ありがとうございます。僕は、元気です。そして、夜は葵たちと一緒に寝ています。……やましいところは全くないです。

「輝さん、今日こそあいつを倒しますよ!!」

「あ、ああ……しかし、あんなやつに俺たちで勝てるのか？」

何故、俺が今、葵たちの部屋となっているところで寝かされているか教えよう。

それは、俺が死んで数日たったある日、葵が世話していたザリガニが一匹脱走。

そして、俺の部屋に入り込んだそうだ。

何故かは分からないが、俺の部屋で逃亡生活を送っていたザリガニは異常なほど大きくなり、水を必要としなくなった。大きさは俺ぐらいはあるだろう。それを教えてもらった俺はびびり……いや、あれは間近で見たら誰だって逃げ出すぜ？さて、そんなわけで俺の部屋には今、化学反応でも起こしたのか非常識なザリガニが居座っているのだ。

「大丈夫です!! 龍がザリガニなんかには負けるはずがありません!!」

おお、言うねえ。だけど……本日この家にいるのは葵と俺だけだ。他のかたがたはおばさんとともにどこかに出かけていた。葵

は熟睡していたので置いていかれ・・・俺にいたってはトイレに入っている間に置き去りを食らった。

「さて、行きましょう！！ちゃんと勝負するところは相手に伝えていきます！！」

ザリガ二相手に挑戦状まで叩きつけてきたらしい・・・いや、日本語分かるのか？

そんなこんなで・・・俺はあの土手にやってきている。俺の隣には目をつぶって相手を待っている葵がいる。まあ、俺も一応、爺さんからもらった木刀を持ってきている。

「・・・輝さん、きました！！」

葵は隣を流れる大きな川を見る。そして、いきなりそれは現れた。

ざばあああん！！

好戦的な瞳・・・真紅に輝く大きな鋏・・・いかにも硬そうな甲羅・・・そして、この前見たときよりも威圧感が増している。

「つて、なんか大きくなってないか？」

そして、この前よりもかなり大きく育っている。しかし、そんなこと関係ないのか葵は右腕を相手に突きつける。

「・・・ザリーー！！今日こそ食料になってもらいます！！そして、輝さんに部屋を返してもらいますよ？」

おお、かなりのやる気だ。ザリガニもかなりやる気満々で鉄の調子でも試しているのかさつきから開閉を繰り返している。……しょうがない、これも俺の為だ。いや、俺としてはまだ、皆のところで寝ていたのだが……。まあ、しょうがないさ。

両者にらみ合うこと、数分。まず動いたのは葵だった。しかし……青いにはなんか特技でもあんののか？

「ザリー、消えなさい！！『激流槍！！』」

うん、すごい鋭い槍状の水が巨大ザリガニに襲い掛かったのはいいけど……。相手はザリガニ……。全く平気そうな顔をしている。駄目じゃん、葵。

「く、こうなったら……。」

華麗なバックステップで俺の隣まで戻ってくると……。俺の後ろに回った。

「ばとんたつちです。がんばってください、輝さん。」

「……。あれ、葵は？」

「私はここで応援してます。がんばってくださいね。」

結局、俺がやらなきゃいけないのね？

そして葵は俺を思いつきザリガニのほうに蹴飛ばした。おいおい、あぶねえだろうー！！

「短期決戦ですー！！こうなったら新しくなった輝さんの力を喰らい

龍と書いてなんと呼ぶ？ ~他多数~

なさい！！」

「おい、人を新型扱いすんじゃないねえ！！」

右からやってきた鍔を避けて俺は叫ぶ。あたったら多分、持つてかれるだろうね？相手の違反グローブを左右に交わしていると、後ろから葵の応援もとい、野次が飛ぶ。

「輝さん！避けないで攻めてください！！その手に持っている木刀は飾りですか？それに、そのザリガニは輝さんのコレクションを処理しちゃったんですよ！！」

何？やはり俺が死んでいる間になんか大変なことがあったのか？しかし、葵め全く、簡単に言ってくれる！！よし、こうなったらザリガニには悪いが・・・俺のコレクションを消してしまったやつには同じような罪を与えてやる！！お前は葵の胃袋の中に消えてもらう！！

「うおおおお！！俺のばらだいすをかえせええええ！！」

懇親の一撃！！たくさんの足が生えている相手の腹の下に飛び込んで裁くように木刀を突きつけ、一気に割る！

動かなくなっただザリガニは・・・あっという間に姿を消した。いや、逃げたわけではなく、葵のお腹の中に収まってしまった。食われた瞬間はトラウマだ。もう見たくないね。実際、葵の腹の中にきちんと収まっているから怖い。

「・・・葵、帰ろうか？」

「……お腹が大きくなって死にそうです。おんぶしてくれませんか？」

土手に寝転がっている葵はそんなことを言った。いや、何言ってるんだ？ 恥ずかしいじゃねえか。

「わかった。ほら、背中に乗りなよ。」

「わああい！！」

俺は結局、葵を背中に乗せて歩き出した。うん、背中に当たっている感触は結構いいね。

「輝さん、家に帰ったら残ったエツチな本は& a m p ; # 2 8 8 8 5 ; 殺ですよ？」

俺は、どうやってごまかそうか家に着くまで考えたのであった。

貴女の料理は怖すぎです。

五、

うううむ。困ったもんだ。いや、何を困っているかといつと・・・

「ほら、輝。手伝ってよ。」

俺は今、加奈の助けをしている。何をだつて？料理さ。おばさんに今日の夕飯の当番を言い渡された俺と加奈は一緒になって奮闘している。これがまた、大変だ。しかし、俺には料理当番の権利が存在していないみたいで、いわば・・・サブパイロットみたいなものだ。横からアドバイスを言ってやるぐらいだ。

「・・・加奈、それには卵は入れないみたいだぞ？」

「え？違つなの？」

加奈は今、何を作っているのだろうか？さっき見たときは魚の骨のスープと豚骨スープを混ぜていたのだが？その後は野菜をぶち込んでいた気がするが・・・一体、何を作る気なんだ？一応、色々試してみたが・・・いつも加奈が先に入れてから気がつくので俺は別にいなくてもいいんじゃないかといった感じであった。

「加奈、一旦それは捨てたほうがいいんじゃないか？」

「ええっ？もつたいないわよ！！ホワイティーにあげればいいじゃない！！犬は何でも食べるんでしょ？」

ホワイティーとは確か、俺の家にいる犬だ。近頃、見ていないの
でどこで何しているかは謎だ。

「……加奈、そんなことは言っちゃ駄目だ。いいかい、自分
で責任持って処理しないとイケないんだぞ？」

「……わかったわよ。」

うんうん、わかってくれて俺は嬉しいよ。そんなの夕食として食
べた日には、もう一度、昇天しそうだからね。

「じゃ、責任もって私が飲む。」

「そうしなさい……いや、やめとけ！」

うつむ、なんてチャレンジャーな野郎だ。危険を顧みずにそんな
ことをする人を見るのはこれが初めてだ。だが、変なものを食うの
は葵だけでいい。

俺は加奈からスープを取り上げ、捨てようとする。

「ちょっと、何やってんのよ!!！」

「見ての通り、魔女スープの処理だ。こんなもんをお前に飲ませた
ら大変だからな。」

何故か、加奈は押し黙った。しまった、言い過ぎたか？

「……輝、私を心配してくれてんの？」

「ああ、当然だ。お前は俺の妹みたいなもんだからな。」

顔を真っ赤にしている加奈。うん、こういう顔はかなり可愛いね。さて、一から作り直した。

「あ、輝……。ありがとう。」

「？ああ、そりゃどうも。ほら、早く作らないと皆帰ってくるぞ？」
ぼけつとした加奈だったが……力強く頷いて残っている材料を包丁で切りにかかる。しかし……加奈はこんなに料理下手だっただろうか？

そして、加奈とともに奮闘した結果……。まあ、あれだ……目をつぶって鼻をつまめば食えるかもしれん……。

「……加奈、失敗はよくある。そう、がっかりするんじゃない……。」

「……そうよね。」

そんなにシヨックだったのか？顔、真っ赤になってんぞ？ま、まさか……

「加奈、料理酒どこにやったんだ？」

加奈の手には料理酒が握られており、中身は……ほとんど減っていないかった。

「ちよ〜っと、飲んじゃった！！てへえ！！」

龍と書いてなんと呼ぶ？ ~他多数~

「どつやら加奈は酒に弱いようだ。うん、足元ふらふら・・・顔はお猿さん・・・そしてこつちにやっつきやがった!!」

「あきらあ! いい子いい子してよお?」

「はあ? 頭撫でろつてか?」

加奈は俺に抱きつくようにもたれかかっている。全く、龍は酒に強いんじゃないのか? ヤマトノオロチだってこのくらいじゃよわねえよ。

「・・・してくれなきゃ泣いちゃうぞ?」

お前はあのねずみになった赤ん坊か? はあ、しょうがない。

「・・・ほら、いい子いい子。」

「えへへ・・・」

やれやれ・・・いつの間にか精神年齢まで幼くなつたのかね? そんなに長い間いなかったというわけではないのだが・・・。

「輝、寂しかったよお・・・」

「・・・ああ、すまん。」

泣きながら寝てしまった加奈をベッドに連れて行き、寝かせる。

・・・三ヶ月か・・・意外と長かったのかもしれない。

本当に、皆には迷惑をかけたもんだ。

しかし・・・結局俺は戸籍上死んだことになっているのだろうか

？それに、学校に行けるのか？そして、俺以外の皆が口をそろえて穂乃香ちゃんなど知らないといっているが・・・あれはどうなったのだろう？まあ、今のところはおいとして、俺が今するべきことは・・・後片付けだ。あんな汚いのは久しぶりに見たな。うーん、困った。俺は眠っている加奈の顔を見ながら悩んでいたのだが・・・。

「輝、料理は出来たのか？」

「ただいま、輝さん。」

「輝君、ただいま。」

他の皆が帰ってきたので俺は寝たふりをしたのであった。現実逃避完了！

龍と書いてなんと呼ぶ？ ~他多数~

貴女の料理は怖すぎです。(後書き)

今回は加奈の話になりました。まあ、大体予想すればわかりますが、次は碧さんの話です。御感想のほう、よろしくお願いします。

白衣のお姉さんとデート

六、

「輝君、他に買うもの何かある？」

「いえ、この店ではおわりのようです。それじゃ、次のお店に行きましようか？」

俺は今、白衣の女性と一緒に街を歩いている。白衣なんて珍しいものを碧さんが着ているのでさっきからこっちを見ている人たちが多い。いや、碧さんも結構綺麗なのでそれもあいまってのものなのだろう。俺としてはちょっと恥ずかしい。

「……輝君、ちょっと元気ないみたいだけど大丈夫なの？」

心配そうな顔で碧さんが俺に聞いてくる。うん、こんな美人に心配してもらえるなんて俺って結構幸せ？

「いえ、ちょっとさっきから周りの人が見てくるような気がするんですよ。ええとですね、きつと俺と碧さんが一緒に歩いているからちょっと釣り合っていないって奴じゃないでしょうか？」

「？そうかな……。ああ、なるほど！」

碧さんは勝手に納得して頷き、俺の腕に手を絡めてきた。

「これならいいよね？」

「な、何がですか？」

碧さんにはっこり笑い、俺に言ってきた。その笑顔に百点をあげたい。

「ほら、これなら私の身長と輝君の身長は釣り合ってるよ？ね？」

うむむ、やっぱりどこか変わっているな、このお姉さんは……碧さんがこのような行為に走ったので……俺を見る目（主に男から）が殺気立ってきた。うん、ちよつとこのままここにいたら危険かもしれない……。

「……碧さん、ちよつと裏路地を通りませんか？」

碧さんは何を誤解したのか知らないがちよつと顔を赤くし、

「輝君、そういうのは夜になってからするものよ？まあ、輝君がしたいって言うならいいけど……。」

潤んだ瞳で俺を見てくるが、一応、そんなこと俺は考えていない。

「そうじゃなくてですね、もしかしたら裏路地に何か面白いお店があるかもしれないじゃないですか？たまには行ってみませんか？」

「なあんだ！そんなことなら早く言ってくれば良かったのに……でも、ちよつとがっかりだなあ……。」

俺もがっかりだなあ……じゃなくて、さつさとここから逃げたほうがいいな。さつきよりも殺気が五割り増し！なんちゃって！……さ、馬鹿やってないで行ったほうがいいな。

裏路地には表通りと違って静かなたずまいの店が意外に多かった。二人で色々と話しながら一時間ばかりうろろしている、そんななか、意外な人物が駄菓子屋にて何かをやっていた。そして、その人物が俺に気がつき、目をごしごししてから俺を写真で撮って、お経を唱え始めた。なんだか癪に障るので近づいてみることにした。

「……黒河、お前の近くにお化けでも出たのか？」

「いや、ちょっと死んでしまった親友のお化けを見てね。ハーレムを取られてはたまらないとさっさと成仏してもらっているところだよ。……さて、男の幽霊なんかに取り付かれたら大変だからさっさと逃げなくちゃ。」

そういつて俺の知り合いの黒河くろがわ 暗あんはさっさと逃げていったのであった。全く、失礼な野郎だ。

「……輝君、そろそろ帰ろうか？ 椎名おばさんたちが待ってるからね。」

「そうですね、そろそろ帰りましょうか？」

俺と碧さんは来た道を帰り始めた。途中で、失礼な知り合いに再び出会うことなく、そして、嫉妬の表情をした男たちに会うでもなく、順調に家を目指して歩き始めたのであった。そして、家に帰りつくまで碧さんは俺の腕にずっと腕を絡ませたままなのであった。うーん、いいねえ。

「ただいま。」

「ただいま帰りました。」

二人で一緒に家に帰りつくと、先に碧さんが買ってきたものをおばさんに渡していると葵と加奈がやってきた。

「あ、お帰りなさい、二人とも。輝さん、珍しいザリガニとかいませんでした？」

「輝、おやつ買ってきた？」

全く、二人とも勝手なことを言ってくる。

「ほら、青色のザリガニと加奈が言っていたお菓子だ。」

前者はなんだか怪しい店に売っており、後者にいたっては電車で結構かかる隣町に売っていた。本当は午後から行く予定だったが、その用事も増えてしまい、朝早くから探しに行かねばならなかった。朝起きるのが早い碧さんがたまたまいたので一緒に旅立ったのであった。その碧さんが俺たちの会話に混じってきた。

「今日は二人のおかげでいい思いをすることが出来ました。お礼を言いますよ。」

碧さんは葵と加奈に意味ありげな笑いを送った。対する二人はしまったといった顔になったのであった。

「輝君って本当に可愛いんですよ。腕を組んだらちよっと慌てるし・・・今日は裏路地に連れ込まれちゃいました。」

はっ！殺気が！

俺が避けたところにはまるでバルタ 星人のはさみみたいなものが

突き刺さっていた。そして、油の切れている首をぎこちなく動かしてみると・・・そこにはスパー イヤ人のようになって怒れる二匹の龍が俺を睨んでいたのであった。

「あ、あ、あ、あ・・・ど、どうかしたのか、二人とも？すんごい怖いぞ？」

返事をせずににじり寄ってきた二匹の龍。このまま言ったら俺は・・・どうなるのであるのか？多分、今日の料理は間違いなく、俺の踊り食いになってしまいかもしれない！

「輝君、私たちを心配させた罰を受けてもらいますね？」

最後に、そんな碧さんの声が聞こえた気がする・・・。。ぐばあ！

龍と書いてなんと呼ぶ？ ~他多数~

睡眠(前書き)

ちよつと、長くなるかもしねません

睡眠

七、

さて、夏休みも半ばを迎えたころ、俺は黒河より旅行に行かないかと誘われたのであった。わざわざ、俺の部屋に窓から侵入してやってきた。俺はちょうどその時、まあ、その・・・とあるジャンルの本を読んでいた。人様にいえないことなので伏せさせてもらう。

「・・・で、白川、返事はどうだ？」

俺が首を振ったら間違いなく、奴は俺から取り上げた本を葵たちに渡すに違いない・・・。

「・・・わ、わかった。ぜひとも行かせていただきたい。」

「うむ、ならば葵さんたちと一緒に今日の午後十時に校門前に集合だ。」

そして、暗は窓から飛び降りていったのであった。俺の本をもつて行ったのであった。ああ、葵たちにはばれないように努力して隠していたのに・・・。

まあ、そんなこんなで俺達（主に俺と黒河）はひどい目に会う予定だったらしい。

「・・・なあ、これって何かの罰ゲームか？」

「さあね、僕が覚えているのは山で皆でじゃんけんしたところだったかな？」

季節は夏なのにあたりは吹雪だ。近頃の地球温暖化によって気候がおかしくなってしまったのか？

ああ、俺も覚えている。

黒河のお誘いによって俺たちは避暑地にやってきた。

まあ、ついでに山登りをしようということで、山に登った。

それで、頂上までやってきた俺たちは帰りは別ルートで帰ることになったのだ。んで、何故かじゃんけんにて男子と女子が綺麗に分かれたのであった。拾った磁石を使ったのが間違いだっただろうか？それから確かにばらばらに行ったのだが、結果として俺たちは夏なのに吹雪いているところについたのであった。

「……白川、やっぱりこの磁石はおかしいんじゃないのか？」

「ああ、まちがいなく、この磁石だな。俺たちはこの磁石によってきつとろくな死に方しないと思うぞ？」

磁石の針は先ほどから右や左に動きまくっている。そして、爆発したのであった。

「うむ、これで完璧に遭難って奴だな？」

「ああ、磁石がなくなっただって事は俺たちは遭難者だ。」

段々、寒くなってきた。このままでは鼻水たらたら石像が二つほど、出来てしまうかもしれない。

「……白川、雪だるまでも作るか？」

「いや、いい提案だと思うが、それには賛成できないな。そんなもんを作る前に俺たちが雪だるまになってしまおうと思うぞ?」

とりあえず、どこか吹雪があたらないところを探さないといけない。

「黒河、この山には山小屋とかないのか?」

「残念だが・・・聞いたことはないな・・・しかし、この山には色々洞穴があるらしいことは聞いたことがある。」

ふうむ、ならばその洞穴とやらに向かえば何とかなるかもしれん。

「・・・よし、行くぞ、黒河!」

気合を入れて二人で歩き出した。といっても、雪が目に入らないようにするだけだが・・・で、そんなこんなで数分が過ぎたであろうか?俺たちの目の前にかなり大きな洞穴が姿を現した。

「・・・黒河、この山にはもしかしてだが・・・熊とかいないか?」

「・・・いや、聞いたことがないな。しかし・・・まあ、先に洞穴の中に入ろう。」

とりあえず、話は後でということ二人で洞穴の中に入った。どうやら洞穴内部はあつたかく、暗闇といった感じだが、内部を見ることが可能であった。まだ、奥のほうに行くことができる。

「・・・で、さっきの話の続きは?」

「ああ、ここいらの話なんだが……この山にはたまに、雪女が出るらしいんだ。」

雪女？

「……しかしなあ、それがまた、人型じゃなくて、どつちかというと神様のな扱いなんだ。その姿を見たものはなく、噂では季節はずれの吹雪のときに姿を現すそうだ。でも、吹雪いている間はほとんど、人間たちは家の中にいるから姿を見ないらしい……。それに、姿を見たものは全て、怪我すると言い伝えられているんだよ。」

なんか、おかしな話だ。見たものがないならなんで怪我するのかも分からないだろうし……。

「ま、それはいいとしてこの先に図ったように二つの道があるが、進んでみるか？」

俺が指差すほうには二つの穴があった。ちょうど、二人いるのでばらばらに行けば時間の短縮にもなるだろう。

「……そうだな、じゃ、僕はこっちの道を調べてくるよ。」

どちらかがもしかしたら抜け穴になっているかもしれない。どこか分からない場所に出ても、そこに人が住んでいるなら何とかなるに違いない。

「健闘を祈るよ、白川。」

「そっちな。」

そういつて別れの挨拶を軽く交わす。俺が進むほうは向かって左側の穴だ。さあて、何が出るかな？

洞穴を結構進んだのだが……どうやら、この洞窟には何か鉱石みたいなものがあるらしい……。しかも、それはわずかな光を数倍にして反射するものらしく、外から差し込んでいる光で足元を光らせている……。そんな便利な鉱石なんて存在するのか？そんなときだ……。俺の耳に何かが叫ぶ音が聞こえたのは……。

先ほど、黒河から聞いた話を思い出してしまった。ぶるぶる、いや、これは寒いから震えているわけです。けっして、怖いから震えているわけではないのです。

レム睡眠

八、

奥のほうに進めば進むほど・・・何かの叫び声は当然のように大きくなってきた。それにつれ、鉱石の量も心なしか、多くなってきたような気がする。

「・・・・・・・・。」

普通、好奇心で命を落とすようなことはしないとすが・・・残念ながら俺はそんな男だ。と、いうわけで・・・この音を確かめに言ってきます。

一気に音がするほうへ走り抜けると、そこには大きな空間が広がっていた。

そして、光を放っている鉱石に目が奪われていると・・・俺の後ろで何かが落ちたような音がした。・・・誰か、RPGをしていてボスがいるところに行ったら急に帰ることが出来なくなったということがあるだろうか？今の俺の状況はそんな感じだ。とてつもなく大きな水晶みたいなものが俺の行く手を遮っていた。

「・・・・・・・・む、向こう側が透けて見えるのにいけないなんて・・・・・・・・」

あっち側は分かるのに・・・行くことは出来ない。更に、そんな俺に追い討ちが続く。

ギシヤアアアア！！

どごごのドラゴンがお目目をパッチリ開け、やってきた勇者でも

龍と書いてなんと呼ぶ？ ~他多数~

倒そうかといったときに鳴く声が再び、俺の耳に届いた。……正直、振り向きたいとは思わない。しかし、このままあっちが見える水晶を眺めていてもいいことなんて一つもないに決まっている。現実逃避をしてもろくなことがないのはこの前の加奈の時によく、わかった。あの後には皆から尋問まで受けたのだ。

「……だ・る・ま・さんが……転んだ!!」

振り返ってみた、そこにはすけるような肌を持ったかっこいい、龍がいた。

……その数、二匹。顔が似ているので双子さんのようだ。うん、顔が瓜二つに見えるね……。そして、体が透き通るように見えるから……。いやいや、意外とあっち側も透けて見えてるから……。うん、クリスタル・ドラゴンってやつですか？それとも、スケルトン・ドラゴンのほうがかっこいいか？

ギシャアアアア!!

ううう……。こんなときはあれだ、こんな化け物を倒すには勇者の剣でもないとやってられん!!ここは友好関係を作るしかない!!

「……だ、大丈夫だ！俺はお前たちに危害を加える気は……お前たちに隙が出来るまでそんな気はない!!安心して結構だ!!」

龍の返答は……。口から吐いた光り輝く水晶だった……。遠慮なく、全て俺に直撃。……。心に響く、嫌なものです……。ガクリ……。

「……うむ、久しぶりじゃな、輝よ。」

「ああ、久しぶりだな、爺さん、菜々美。元気にしてたか？」

「うん、私は元気だよ？でも、兄さんってば、また死んじゃったの？」

「……全く、わしらに順番をくれるのは嬉しいのじゃが……あっさりダウンするもんじゃない！！立て、立つんだ輝！！」

「そつだよ、がんばって、兄さん！！」

「……ちょ、そんな押すなって！！う、うわあああ！！」

「輝、久しぶりに呪文でも唱えるんじゃない。」

「く、呪文、忘れちゃったんだよ！！」我が名において命ずる、心の姿を見せよ！！』だったかな？」

「よし、多分、それであつてると思うぞ？」

二人に半ば強引に追い出され、俺は再び、娑婆の世界に戻ったのであった。正直、もうちょっとダウンしていたかった……。だつて、あの龍怖いんだもん！！

そして、俺の目の前には一人の美少女が鋭き刀らしきものを持ってたたずんでいる。

「……ほお、お主、我が姉妹の攻撃を食らってもなお、立っていられるか？」

「へっ、俺としてはもうちょっと死んでいたかったんだがね、人間

つてのは生きるために生まれてくるもんなんだよ!」

もう一匹はいない。どうやら、もう一人の侵入者を排除しに行つたようだ。く、ここはさっさとけりをつけないと・・・もしかしたら、黒河が危険かもしれない。

「・・・征くぞ!!下郎め!!」

「上等だ!かかってこいや、よくもとんでもない目に合わせてくれたな!!その仕返しはプレゼントして返してやるぜ!!」

光を放つ水晶の欠片がまっすぐ、俺を狙う。しかし、爺さんと菜々美が応援してくれたのだ。やられるわけには・・・いかないんですよ、透き通るような肌を持つ、ドラゴンさん?こっからは・・・ちよつと、いたずらしてやるぜ!!

「・・・よ、は、と、」

飛んできたものは全て避けられた。・・・そして、物干し竿を二つに折つたような長さの水晶らしき物騒なものも避けることに成功。

「・・・しまつ・・・」

よもや、さっきは成功したので避けられるとはまったく思っていなかったらしい、龍は制御できなくなった自分の体重のせいで前に思いつきりつんのめった。

そして、その龍の行き先には鋭く上がった水晶が牙を向いていたのであつた・・・。

「……ちい!!」

結局、俺は敵の龍に手を差し伸べてしまったのであった。後ろから抱きしめるような感じで助けることが出来た。……掴んだところはちよつと危ないか？まあ、俺のおかげによつて、とがった水晶は彼女ののもとでストップしたのであった。……うん、彼女の命も救えたし、俺もなかなかいい思いが出来た。

「……いつまで、触っているんだ？」

「あ、すまん。これは事故だ。」

掴んでいた手を離すと、さつさと俺から離れた。そりゃそうだ、あいてはまだ、どこも怪我なんてしていないしな……。

「……なあ、俺の負けでもかまわないから、話を聞いてもらいたいんだが？」

「……よからう……」

こうして、何とか話を聞いてもらえることに成功したのであった。

ノンレム睡眠

九、

俺は、そのままの体制でこれまで何があったのかをこと細かく伝えたのであった。当初は、怪しげに聞いていた相手だったが、だんだんと信じる気になったらしい……。俺を信用してくれるまでにいった。

「……ふうむ、なるほど……。輝が言うには、遭難したということか？」

「ああ、それで、俺の友達と手分けして二つあった洞穴を進んでいたらお前たちに会ったんだよ……。しかし、もう一人はどこに行っただんだ？」

「きつと、輝の友達とやらを探しに行ったらしいな……。もちろん、悪い意味出だ。どことなく、あいつは気性が荒いからな……。そんなことなら早く言ってもらえば私たちも協力したんだがな……」

はあ、そつちから攻撃してきたのではないだろうか？もしも、こちに来たのが黒河だったら今頃、死んでるだろうな……。いや、俺もいつペン死んじやったな。と、そんな時に龍がいる方向の壁に亀裂が入ったのが見えた。あ、危ない！！

「くそお！！」

「うわあ！！」

とびだすな 俺はいきなり とまれない 白川 輝

ぎりぎりで、相手を巻き込むことなく、水晶を全て避けることに成功した。あ、あぶねえ！！飛び出てくるトラック並みにあぶねえ！！

「・・・あ、白川じゃないか・・・」

「く、黒河！」

壊れた向こう側からは黒河がひょっこりと現れた。その肩には誰かを担いでいる。

「・・・黒河、誰を担いでいるんだ？俺たちと同じ遭難者か？」

「うん、どうだろうね？僕が音がしたので後ろを振り返ったら倒れていたんだよ。しかしまあ、白川、君も好きだねえ・・・。葵ちゃんたちがいるのに・・・」

俺は今の状況を再び解読してみると・・・龍の上に覆いかぶさっていたことを理解した。好都合で、したの龍は気を失っている。

「・・・いや、これは事故だ。断じて、俺が襲い掛かったわけではない。」

「さあて、十人中の何人が君の言うことを聞くだらうね？」

肩に担いでいた女の子を俺の隣に横たわらせる。・・・こいつは・・・俺の下にいる女の子の双子の片割れじゃないか？

「白川、あつちはどうやら他の村に繋がっているみたいだから行ってみないか？それとも、この二人も連れて行くかい？」

もとから、ここに住んでいたから頼って置いて大丈夫だろう。俺は黒河に嘘をつくことにした。

「いや、この二人はここで人を待っているらしいから、俺たちは先に行こうか？」

こうして、俺と黒河は水晶の洞窟を何とか、ぬけることが出来た。そして、俺たちの目に映ったのは・・・夏の海であった。・・・何時になったら戻れるんだ？

「・・・辺りには人っ子一人いないが・・・ここはお前が知っているところか？」

「・・・いや、全く分からないね・・・」

聞こえてくるのは波の音だけだ・・・いったい、どうなっちゃまったんだ？吹雪の次は謎の浜辺か？俺たちは山の中にいたんじゃないのか？

「・・・白川、あつちから人の声がするぞ？」

黒河が指差すほうにはかすかにだが、何かの影らしきものが見える。・・・しかし、どこからどう見てもあれは人間じゃないだろう・・・。

「・・・黒河、あの影は人間じゃないだろう？何に見える？」

黒河も気がついたのだろう・・・顔を少し硬くして俺のほうを見た。

「・・・そうだね、巨大な蛇何かじゃないかな？しかも、こっちに向かって泳いできているように見えるよ。・・・まあ、海を泳いでいるんなら、海蛇だろうけど・・・空を泳ぐとなるとなんて呼ぶんだらうね？」

まあ、びつくり！！近頃の蛇は空も飛ぶぞですか？

「・・・黒河、さっきの洞窟に急いで戻ろう。なんだか俺たちはおかしな世界にでも入っちゃったらしいからな。」

「そうだね、僕もその意見には賛同するよ。」

触らぬ神にたたりなし！！俺たちは空を飛んでくる何かがかっちにつく前に水晶の洞窟の中に逃げ込んだのであった。いったい、何でここには龍が多いんだ？

「全く、なんて海だ・・・これじゃあ、水着ガールもゆつくり干渉している暇がない！！！」

「全くだ！あんな用心棒みたいなもんがいるなら危険すぎて鼻の下を伸ばせねえな。」

ぜえぜえと二人で息を吐きながら呼吸をただす。さて、これからどうしたものだろうか？

「・・・吹雪が収まっているかもしれないから、ちょっと戻ってみよう、白川。」

「そうだな。見るだけなら大丈夫だろう。」

今度はやってきたほうに向かって歩き出す。途中、なぜ開いたかわからない穴の中を覗かず（その中には今も、あの二人が気を失っていることを願いたい。）さっさと洞窟の入り口のことだけを考えると通り過ぎた。

「……どうやら、吹雪は収まったようだね？」

「……長かったな……いろんな意味で……」

洞窟の外には晴天が広がっており、雪が降ったような後など、これっぽちも見当たらなかった。後ろを向くと、未だに水晶の洞窟が残っており、今までの経験が嘘ではなかったことを静かに物語っている。

ギヤアアアアア！！

つと、うるさく、物語っている。まあ、俺がこんな危険なところに戻ってくることなんてそうそうないと思うけどな。

目覚め

十、

二日ほど、俺たちは行方不明だったらしく……俺たちが帰ってきたことを知った葵たちは泣いて喜んでくれた。まあ、帰ってきたといつても下山している途中で葵達と会っただけだが……葵たちが来る前に、俺は黒河に龍の話をしておいたのであった。

「……また、どこかにだまって行くんじゃないかと思ってましたよ?」

「そうよ、どれだけ私たちが心配したか分かってるの?」

「これはまた、お仕置きが必要かもしれないね?」

三人に俺一人だけが起こられている間……黒河は一人、今まで起こったことを考えているようでもあった。

「……暗兄様!お怪我はありませんか!」

そんな時、どこかで見た二人の美少女が黒河のもとに走ってやってきた。……その顔は、水晶の洞窟であったあの二人にそっくりであった。え、あの二人って黒河の妹たちだったのかと思ったが……どうやら、黒河の目を見ると違うようだ。

「……し、白川……」

何か言いたげな奴の顔……見るだけで分かるが、こんな二人の妹など、僕は知らないといっているようだった。……いつから、

ミステリーになったんだ？いつの間に、奴に妹なんてできたんだ？そして、ほんとにいたとしても何であんなにあいつの妹は両方とも、可愛いんだ？誰か、教えてくれえ！！

「ま、これも何かの運命・・・黒河、よかったな・・・神様がもてないお前にプレゼントしてくれたんじゃないのか？」

「ちょ、何言ってるんだよ！僕は出来れば年上、もしくは同年代が好みなんだよお！！」

突っ込むところはそこかと思いなながらも、誰にこんな不思議な経験を話せばいいかぜんぜん、分からなかった。ううむ・・・、困ったものだ。黒河はいきなりできた謎の妹たちに好き好き光線を当てられてまいつている。

「輝さん、顔色悪いんですけど・・・大丈夫ですか？」

「え、ああ・・・ちょっと色々あつて疲れたんじゃないかな？」

加奈と碧さんは俺と黒河のために何かジュースを買いに行ったようだ。葵が言うには、もう少しで黒河の家のもものが迎えに来てくれるらしい。

「ほんと、私のお姉ちゃんも心配してたんですよ？」

「ああ、そりゃ・・・謝っておかないとな・・・？」

お姉ちゃん？葵にお姉ちゃんなんていたろうか？いや、いなかった。断じていなかった・・・。なんとなく、嫌な予感がして、黒河のほうを見た。黒河も、謎の妹たちに抱きつかれながらも、葵

に姉がいないことに気がついて水晶の洞窟の奥であったことを思い出して何かに気がついたらしい……。

「……黒河、海で見たものを覚えてるか？」

「う、うん……あれってもしかしてだけど……蛇じゃなくて、龍？」

「お、二人とも見つかったんだねえ、私、心配しちゃたぞ？」

黒河とともに、回らない首を無理やり動かし、声がしたほうにまわす。と、そこには葵に似ている女性が手を腰のところに当てて立っていた。もちろん、俺はこんな女性を見たことないし、黒河だつてこつちに呼んだ覚えはないはずだ。

「白川、よかったな……綺麗なお姉さんが心配してくれて……」

「黒河、その言葉、お姉さんを妹に代えてそのまま返すぜ？」

葵の姉だといった、その人物は俺の耳元でこう言った。

「……こんな綺麗なお姉さんから逃げちゃ駄目じゃない？輝君？」

にやりと笑う、その顔は……妖艶の感じで怖かった。しかし、こんなところで震えていたって始まらない。

「……今度、話したいことがありますので、どこかに行きませんか……ええっと……」

「名前は藍よ。藍姉さんといつものように呼んで構わないわ。」

「どうやら、この人が何者かは分からないが・・・話せる相手が出来たのは事実のようだ。いったい、俺たちが経験したあれは何だったのだろうか？そして、一人、蚊帳の外であった葵は不満そうであつた。」

「むう、お姉さんと輝さんってそんなに仲が良かったんですか？」

「葵、大丈夫よ・・・私はあなたを応援してるからね。」

別れ際、彼女は俺に携帯番号のアドレスを渡してどこかに去つていった。黒河は妹たちにいまだにじゃれ付かれており、いきなりできてしまった妹たちにどうやって接すればいいかわからずそのままにされていた。まあ、かく言う俺もさつきから葵に後ろから抱きしめられているのだが・・・。

「葵、どうかしたのか？」

「・・・他の人にとられたらたまりませんので、予約しているんです。」

「・・・そうですか。それで、それは何の予約でしょうか？さつきから、腕に力がこもっているような感じがするのですが？あ、あれ？なんかまた、寒くなってきたような・・・。

「・・・輝さん、起きてください！！風邪引きますよ？」

「ふえ？」

俺は自分の部屋に突っ伏して寝ていた。どうやら、今まで夢を見ていたようだ・・・そう、自分の部屋でクーラーの温度を下げられるだけ下げて寝ていれば誰だってこうなるだろう。

「・・・輝さん、旅行はどこに行くか決まったんですか？」

そうだった、俺は今、みんなで行く旅行を探していて、寝てしまったようだ。俺が見ている本には山の風景が映し出されており、その隣にはちよつとエツチな本がおいっている。

「あ、黒河さんからお電話がありましたよ？なんでも、旅行にいつしよにいこうだとか？」

俺は、背筋が寒くなる感じがした。夢のようになるのはいやだね。

目覚め（後書き）

えーと、輝が見ていた不思議な夢話は一旦ここで終わりです。出来たら、感想を聞かせてください。

龍と書いてなんと呼ぶ？ ~他多数~

「輝さん、どうですかっ!!」

そして、葵が水着をまとって姿を現した。

「葵、似合ってるぞ。うん、実にいい。」

「そうだね、僕としてはこれのために海に来る男だからね
まあ、ちよつと露出度が少ないのが僕としては残念だ。」

「輝さん、砂のお城ができれば海に入ってきてくださいね?」

そういって、葵はエンジン全開で海に突進して行った。まあ、彼女が起こした地震によって、俺たちの城は半分崩壊してしまったがな ちよつと、水をかけすぎたか?と、俺が砂を再び集めなおしていると、誰かの足が俺の目の前に現れた。

「 加奈か。」

「 輝、早く泳ごうよ?」

下から加奈を見上げる感じで加奈の姿を確認する。 ス、スクミズだとお!!

「 白川、何かいってやれよ 期待しているような目で君を見ているぞ?」

黒河は俺のほうを意味ありげな視線で見ている。 お、おい で、でも こんなもんはどんな風にほめてやればいいんだ?俺としては加奈には何も期待していないぞ?と、とにかく 何か言っつてやらないといけないな 。

龍と書いてなんと呼ぶ？ ~他多数~

「と、とつても・・・ロリコンにさらわれそんなキュートな格好をしているな、加奈・・・俺としてはもつと普通の水着にしたほうがいいと思うぞ？」

加奈はちよつと考えるような仕草をして、頷いてくれた。・・・よかった、怒らないで・・・。きつとここで暴れられたら水もあるから効果は抜群って奴だな。

「輝、じゃあ、先に行ってるよ？」

「ああ、もうちよつとで砂の城もできるから、それができたら俺も黒河も海に泳ぎに行くからな。」

そういつて、加奈は葵のもとに走っていった。そんな後姿を黒河は思いつめたように青色のため息をついた。

「・・・黒河、もしかして加奈にでも気があるのか？」

そんなことをふと、黒河に聞いてみたが・・・奴はくらくい顔で答えた。

「・・・いやね、僕としては遠慮願いたいな・・・妹系は僕の守備範囲外だよ・・・距離として、冥王星から太陽までの距離はざつとあるな・・・」

そんなことを言う黒河の姿はなんだか、かわいそうであった。な、なんか聞いて罪悪感を覚えてしまった。

「・・・輝君、似合うかな？」

さて、暗い気持ちを切り替えてくれる、本年度の本命がきましたあ！！白衣の天使といっても過言ではない、俺のお姉さんの存在、碧さん！！

辺りの連中は碧さんをちらちら見ている……。こら、見るんじやねえ！減るじゃねえか！！

「うむ、完璧だな……。白川、今年はいいものを見せてもらったよ。」

「ああ、そうだな……。碧さん、ありがとございました。」

「いえいえ、こちらこそ……。輝君、私も先に海で泳いでくるよ。忘れずに来てね？」

「ええ、ぜひとも行かせてもらいます。」

そういつて、碧さんも葵たちのもとに向かっていったのであった。……。行くときに俺たちの砂の城を粉碎して行ってしまったが、まあ、見物料と思えば安いものだ。さて、俺もそろそろ泳ぎに行くとするかね？

「……。黒河、そろそろ泳ぎに行かないか……。？どうした、なんか化け物でも見る目になってるぞ？」

黒河の目は先ほど、葵達が出てきたシャワー室に固定されており、膝はがくがくとなっている。

「あ……。ああああうわあああ！！！」

黒河はぺたんと砂浜にしりもちをついてしまった。と、シャワー室から二つの影が現れてこっちに猛然とダッシュしてきている。す、砂煙が上がってるう！！

「暗おにいさまあ！！」「

俺の目はとてもいい。そして、俺の目には夢に出てきていたあの二人がこっちに黒い水着をまとって走ってきていることが分かる。まあ、夢の中と違うのは髪の毛が黒色と、まだ全体的に色々幼いということだ。

「……白川あ、どうしよう！！腰が砕けちゃったよ……」

本当に、腰が砕けてしまったのだろうか……黒河はしりもちをついた状態のまま俺に助けを求めてきている。……いや、困ったな……。

波

十二、

どうすることもできない・・・俺は、そういうことがあることをはじめて知った。俺の目の前では、双子の姉妹であろう、彼女たちによって黒河が俺の目の前から消えてしまった。

「し、白川あ、助けてくれえ！！貧乳たちの相手をするのは僕はいやだああ！！へるぷみー、えすおーえす！！」

「まあ、暗おにいさまったら、恥ずかしがりやなんだから・・・。」
「そうですね、慣れれば大丈夫です、慣れは人を強くします。」

ああ、黒河、お前が何で加奈を見ていたか分かったよ。・・・
すまん、俺には何もしてやれることはない。

「逃げるのかつ、白川あ！」

「さらばだ、あとは三人でいちゃいちゃデモして時間を過ごしてくれ。」

俺は、黒河を見捨てて夏の海に向かって走り出した。後ろからは黒河の叫び声が聞こえてくる。まあ、よかったじゃないか、俺には関係ないもんねえ！

「輝さあん！！ほおら！！」

海に入って恒例・・・水の掛け合い・・・だが、葵が相手だとそ

う入ってられないということを俺は知ってしまった。

「ちょ、な、何で津波が・・・がばがばがば・・・」

葵が水を俺にかけようとすると、すさまじい水流が発生し、それはあつという間に俺の頭よりちょっと大きい波となつて俺を襲つたのであつた。うう、海の水ってしょっぱいや・・・まるで、涙の味だぜ・・・。

「く、くそお！！こんなところで泣いてちゃ、男がすたるぜ！」

「・・・もともと、女子に話しかけられたことなんて皆無の輝が言う台詞？」

ぐ・・・加奈の指摘も鋭いが、俺としてはそんなことで負けるつもりはない！！

「・・・ならば、男対女で三種目勝負だ！！」

「ああ、おもしろそうですね、輝君、やりましょうよ。」

さて、男チームのチームメンバーは俺と黒河・・・ただ、それだけである。女チームは葵、加奈、黒河の従姉妹の早紀さきと奈木なきである。審判は碧さんだ。そして、気になる種目はすいかわりとビーチバレー、フラッグが立っているところまでの競争である。

「・・・では、すいかわりは男チームの先手をお願いします。なお、すいかの数が足りないので先にわつたほうの勝ちとなります。」

「黒河、がんばってこいや！！」

「ああ、任せておいてくれ。」

目隠しをして、ぐるぐる回り、出撃！！そのままこっちに走ってきて……

「せりやああああ！！！」

「ちよ、それはおれだあ！！のわっち！！！」

俺は振り落とされた木刀（俺が護身用にとってきた）を受け止める。あ、はじめっから良ければよかったなあ……

「……ええ、男チームは見事仲間割れとなったので、次は女チームです。」

「加奈ちゃん、がんばってえ！！！」

「「がんばってください、加奈さん！！！」

「まっかせておいてえ！！！」

そして加奈は黒河と同じように回り、スイカの方にきちんと進んでいる。

「……白川、このままじゃ負けちゃうよ？」

「まあ、どうせ加奈の事だからそこらへんでこけるんじゃないか？」

思ったとおり、加奈は俺たちが先ほどまで作っていた砂のお城）

既に原形をとどめていない。(にひっかかり、こけた。スイカまではまだちょっと距離がある。だが、俺の予想を超えてしまった。

バシーン！！

雷が落ちたような音がして、皆はこけた加奈から音がしたほうに目を向けた。

「……………」

そこには、黒焦げになって二つに分かれた元スイカが存在していたのであった。

「…………まあ、スイカが分かれたから、女チームの勝ちです。」

「……………ありが？」

「まあ、ハンデと思えばいいんじゃない？」

俺はとりあえず、こけた加奈を起こしに行った。未だに、こけたまんまである。念のため、救急箱を持って出勤。

「…………加奈、大丈夫か？」

「…………ちよっと鼻をすりむいただけよ。心配ないわ。」

「…………まあ、念のため、消毒だけはしておくからな。」

俺は座って加奈の低い鼻に消毒をして、絆創膏を貼ってやった。

「あ、ありがと……。」

「ま、なんにせよ、俺たちはピンチだな……加奈はあっちで座ってみてな。」

俺の言葉に加奈は珍しく、したがって碧さんの所に向かったのがあった。

「さて、次はビーチバレーだったな……。」

相手は既に準備万端らしい……敵は黒河の従妹達だ。

「行くぞ、黒河！！震えてんじゃねえ！！！」

嫌がる奴を俺は引っ張ってバトルフィールドまで連れて行ったのであった。

太陽

十三、

相手は双子なので、きつと凄い連携の数々を繰り出してくるに違いない。よし、こちらで友情パワーとやらを見せてやるっじゃねえか。

「いくぞ、相方！！返事しろ！！」

二人で綺麗にはもった。……どうやら、いいところを見せた
い気持ちは黒河の奴も持っているらしい……。

「さ、いきますわよ、お兄様方……。」

サーブ権はあちらから……ちなみに、三十一点先制で勝利となる。さて、がんばりますかね？

「……お兄様私の愛をうけとつてえ！！」

兄愛ぶりを早紀？いや、奈木かな？俺にはどちらがどっちかさっぱりわからん。まあ、とりあえず、双子の片方が兄愛ぶりを本人（黒河）に思いつきりぶつけるためにモーションに入った。……バレーボールにハート型のオーラが出ているのは俺の目がおかしくなったからか？

「……ロツク、オン！食らえ、『兄愛魂』！！」

ボールは黒河めがけて飛んでいく。

「黒河、あれを受け止めて俺の頭上に上げる!!」

「ひいひいひい!!怖いよお!!」

黒河はその場にへたり込み、身を震わしている。……駄目じやん。まあ、そんな黒河だったが、頭で直撃を受け、後方に吹っ飛んでしまった。だが、ボールはちょうど頭でバウンドし、俺の頭上にやってきた。よっしゃあ尊い犠牲だったが……これはこれでラッキー!

「そりゃあ!!」

ボールは綺麗に相手方の真ん中に落下。急いで二人は反応するも、ボールが地面に着地するほうが早かった。

「やったぞ、黒河!!先制点だ!」

俺は振り返って黒河を見る。……と、黒河はいつの間につつたのだから……砂の城壁の後ろに隠れこんでいる。……どうやら、妹発作にかかったらしい……。ま、しょうがない。

「ええと、先ほど、サーブを打ったほうはどっちだ?」

「え、私だよ。」

俺は、サーブを打ったほうに黒河を迎えに行かせた。まあ、直撃させたのはあやまるから、早く戻ってきて欲しい……。双子の片方は、俺にそういわれるとうなずいて砂の城壁を乗り越えていった。

「う、うわああ!!」

そんな声が少し、聞こえた気がする。まあ、ここからみると、黒河が四つんばいになって逃げている姿が切れに見える。ああ、悲しいかな？四つんばいの状態では砂の城壁を越えることができない。追い詰められてしまった黒河、どうする？つと、こんなことはどうでもいい。

「審判、選手交代！黒河から・・・誰か、暇な人をお願いできますか？」

「認めましょう。黒河選手と早紀選手は怪我のため、交代ということで・・・黒河君の代わりに私が入ります。先さんの代わりは加奈さんが入ってきてください。」

後ろからギャーという声が聞こえて気がした・・・残った双子のほうも走り出し、砂の城壁に侵入。・・・。

「審判、葵を加奈のほうに入れてください。お願いします。」

双子が消えてしまったのをため息をつきながら見ていた碧さんは加奈の隣に葵を選手として入れ込んだ。さて、試合再開。

「碧さんはサポートに回ってください、俺が何とかします！」

「わかったわ、輝君。サーブ権はこちらだから、私が打つわね？」

俺は頷き、相手を見やる。さて、この二人の実力はいかほどののだろう？ぼさっとしていると、後頭部にすさまじい衝撃が襲ってきた。

龍と書いてなんと呼ぶ？ ~他多数~

「ごめん、失敗しちゃった！」

そう、碧さんが撃ったボールは直線状にある俺の頭に直撃。・・・
・葉っぱが数枚、俺の体に刺さっているのを確認。な、なんじゃこ
りゃ・・・。

「さて、もう一回打てるよね？碧、いつきまあーす！！！」

今度はあたらないうように脇にそれて後ろを見ることにした。うむ、
これでとっさの反応ができるようになった。

「・・・『緑の風』！！！」

すさまじい風が吹き荒れ、新緑の葉をまとったボールは相手側の
陣地に侵入。しかし、それを難なく打ち返す加奈・・・。腕には紫
電が見える。おいおい、何をする気だ？

「・・・『紫電一閃』！！！」

お互い、もはや人間離れの技を連発し・・・ギャラリーが増えて
きた・・・俺はちよつと忘れていたが・・・こいつらは龍だったね。
なんだか、俺だけ置き去りを食らった気分だ。まあ、そんなこんな
で、こちら、三十点、あっち、二十九点。あと、一点でこちらの勝
ちだ。そして、運命の対決は始まった。サブ権はこちらにあるの
で有利とおもわれる・・・もっとも、碧さんが打てばの話だが・・・。

「がんばってね、輝君。ほら、黒河くんの敵をとるのよ？」

「ええ、わかってます。・・・そおれ!!」

俺は普通にボールを打ち上げ、相手陣地へと侵入させる。もう少しで、着陸だったのだが、葵がそれを拾い上げる。高く上がったボールを加奈が電撃をまとった右腕で打ち込もうとする。

「・・・させるかあ!!」

俺は飛び上がってそれを防ごうとして、あせった。今頃あせってもどうしようもなかったが・・・加奈の手は止まらない。振り落とされたボールはありえない光を放ちながら俺の顔に直撃・・・その衝撃で俺は後方に吹っ飛ばされたが碧さんが受け止めてくれた。ボールは相手の陣地だ。どうやら、勝ったらしい。

夏の夜空

十四、

一対一の引き分けのまま、男VS女の戦いは終了を迎えそうになる。最終局面・・・俺対葵となった。黒河はあつちで双子たちと仲良く寝ている。ま、しょうがない奴だ、これは罰ゲームとでも思ってくれたまえ・・・。さて、次のルールは簡単・・・海の上にある旗まで泳いだほうの勝ちである。葵がどうかは知らないが・・・俺は意外と泳ぐのは得意だ。

「位置についてえ、よーい、どんっ!!」

審判の声に合わせて俺と葵はいつせいにスタートを切る。

と、いきなりだが・・・あっという間に葵に先を越されてしまった・・・。
え、あれって反則じゃない？人間の形してないじゃん!!あれってなんていうか知ってる？龍だよ、龍！葵はいつの間にか龍の姿になって泳いでいた・・・俺のときと違ってかなり泳ぐのは早い・・・。そして、一度も息継ぎをせずに、旗のところまでストップ。水中から葵が顔を出す。その顔は既に人間に戻っていた。俺は、未だに半分も行っていない・・・。葵は呆然としている俺のところまで戻ってくる・・・笑っていった。

「どうですか、輝さん。負けを認めます？」

「・・・・・・・・」

いや、これは・・・なんだ？自分がエースパイロットだと思っていたら、実はへぼパイロットだったという奴か？もしくは、セン

サーに気がついて後ろを向こうとしたら胴体を持っていかれちゃった悲しいパイロットか？

俺がそんな感じで固まっていると・・・葵は俺のほっぺたを両手で引っ張った。

「・・・輝さん、あまりのショックでおかしくなりましたか？」

「ひ、ひや・・・わははった・・・負けを認めるよ。俺たちの負けだ。」

一人、既に負けている奴もいるが・・・それはしょうがない。

「じゃあ、罰ゲームは一人ひとりの要求を受け入れるということだと思いますよね？」

「ああ、煮るなり焼くなり好きにしてくれ・・・。」

もっとも、ザリガニを煮るなり焼くなりで出されたらさすがにそれは食べれんがな・・・。そろそろ、日も落ちかけてきた。俺は葵と一緒に泳いで皆が待っているところまで戻ることにした。

「輝君、あっさり負けちゃったね？」

「輝、おっそーい!!！」

「・・・へっ、どうせ俺は遅いですよお!!！」

加奈たち、不平たらたら、俺、心の中で泣いています。葵は結構ある胸をそらしてすんごく、嬉しそうだ・・・。へ、俺に勝ったくらいでそんなに嬉しそうにするんじゃないかねえ!!と、思っていたのだが、

葵はすねている俺の片手を握って言った。既に、他の皆は俺を置いて帰り始めた。

「これも、輝さんおかげですよ？」

「は？」

そういつて葵は俺を再び置き去りにしてみんなの後をおつていった。・・・どういう意味だろうか？俺はまじめに泳いだつもりだ。・まあ、三メートルぐらいしか泳ぎきれなかつたけどな。しかし、今はそんなことを考えている場合ではない。置き去りにされては大変だと俺はみんなの後を追うことにした。

ぎしやああああ！！

そんな声が聞こえた気がして、俺は後ろを振り返った。海は相変わらず、波を運んでいるだけだし、輝いていた太陽は今では夕日になっている。どこにも、おかしいところはない。

「？」

俺は気のせいだと思い込むことにして、急いでみんなのあとを追うことにした。

豪華な夕食後、黒河とともに海が見える露天風呂に入ることになった。

しかし、俺はちょっと遅れてしまった。そして、男風呂のほうには（黒河の別荘には女と男とそれぞれ別にしてある。なんでも、冬は旅館として機能するそうだ。）女物服が置いてあった。どうやら、あの双子が黒河と一緒に入っているらしい……。俺は思い直して

叫び声が聞こえてくる露天風呂を後にした……。

「……はあ。」

既に暗くなった海岸で俺は一人、ため息をついた。……自分で言うのもなんだが……男が一人で海岸にいても失恋したと思われるに違いない。そんなことを考えて自己嫌悪していると……。

「輝さん、どうかしたんですか？」

葵が俺の隣にやってきた。まだ、風呂に入っていないらしい……。まあ、ちょうどいいや、聞きたいこともあったし……。

「葵、何でお前は俺に勝ったときに俺のおかげだって言ったんだ？」

俺の問いかけに葵はちょっと驚いたような感じで俺の顔を覗き込んだ。

「あ、覚えてたんですね……簡単なことです、私は……輝さんが死んでしまった後、輝さんが習っていた拳法を習い始めたんです。それで……修行の一環として、龍に戻って泳ぐ方法を身につけたんですよ……。それで……。」

続きを言おうとしたが、葵は涙を流し始め、言葉を出すことはできなかつた。え、何で泣いてんだ？

「……お、おい……葵、大丈夫か？」

しかし、返答は帰ってこず、帰ってきたのは葵のタックルであった。

「毎日が・・・毎日が不安でたまりませんでした！輝さんを・・・
忘れたくなかったです！絶対に！私は・・・私は・・・」

俺は無言で葵を抱きしめようとしたが・・・。

「あ、葵さんが泣いてる！！輝、何、泣かしてるの！！」

「あらあら、いけませんね、輝君は・・・。」

加奈と碧さんがやってきてしまったので俺のひとかけらの勇気も
吹き飛んでしまった・・・。アンパンン、僕に勇気を一ダース
ほど分けてくれ・・・。

葵は、俺の胸から顔を上げ、夜空を見上げて呟いた・・・。

「輝さん、宇宙に、龍っていますかね？」

俺は肩を竦めて星が光っている空を加奈や碧さん、そして葵と一
緒に見上げた。

夏の夜空（後書き）

ええっと、ちょっと今回の話の終わりかたは綺麗だったなあと自画自賛しています。まあ、それはいいとして・・・今の所は話に急転回がないなあと思っと思っていますのでどうかしたいと考えています。たまに、感想を書いていただけると非常に有り難いです。

龍と書いてなんと呼ぶ？ ~他多数~

久々の学校

十五、

長いようで俺にとっては短かった夏休みは平和に幕を閉じた。・
・さて、学校にでも行きますかね？夏休み中、俺は毎日、三人によつて、高校の勉強を毎日教えてもらっていた。いきなり二学期の勉強を教えられてもさっぱり分からないからだ。まあ、それのおかげで何とか理解することができた。

久しぶりに会う連中の顔をまじまじと眺めたりもして、話もした。それなりに夏休み明けとしては活気のある連中が多かった。そして、午前中の学校は終わりを告げ、放課後となった。俺は久しぶりに部屋へと向かったのであった。

「さて、一学期の途中で輝君がリタイアしてしまったので、その時点で部活は無期限休部となってしまうましたが・・・ゴキブリ並みの生命力を持つ輝君が復活できたので、再開したいと思いまあーす！！はくしゅー！！」

ばちばち・・・

拍手をしているのは自分だけ・・・碧さんはようやく、気がついたようだ。顔を傾けて俺の顔を覗き込む。

「輝君、拍手は？一人で拍手をするのは寂しいよ。」

「・・・いや、俺が拍手したとしても二人しかもとよりいませんよ？葵と加奈は先ほど、携帯でおばさんの命令を受け、どこかに行ってしまった。」

碧さんはそれを聞いてうなつたが、近くにあつた書類棚から何かを引つ張り出してきた。・・・かなり古い、何かの書物であつた。ま、まさか・・・江戸時代の工口本か？・・・いや、そんなもんが学校にあるわけないか。

「碧さん、それなんです？」

「これはね、この地域に伝わる色々な話を纏め上げたものらしいわ。そうねえ、いわば、この地域の不思議話かしら？」

俺はそれをぺらぺらとめくつてみることにした。碧さんはそんな俺の隣に立ってにこにこしている。

「輝君、久しぶりの二人つきりだね？」

俺は古文書？に意識がいつているので適当に返事をしてしまった。

「ええ、確かにそうですね・・・。まあ、色々大変でしたから・・・。」

その瞬間、俺は横からの衝撃にふらりとなつた。

「み、碧さん？何をしていますんですか？」

「・・・輝君が適当に返事するからだよお。お姉さん、泣いちゃうよ？」

え、何？俺が悪者？こんなところを加奈に見られたら再び何かを言われるに違いない。俺はあたふたしながらもどうすれば一番いいかを考えてみた。

「わ、悪かったです。自分が悪いと思っと思っています!!」

「本当に?」

「ええ、俺の目を見れば嘘を言っているかいないか、絶対に分かり
ます。」

俺はそういつて碧さんの目を見据えた。あつちも真剣な目で俺を
見てくる。その目が段々、大きくなってきたと俺が気がついた
ときには後の祭りだった。

「むぎゅっ?」

そう、俺の目が碧さんの目以外を見ることができなくなるぐらい
に接近してしまっていたのだ。当然……くっついてしまった。

俺は急いで碧さんから離れた。

「……え?ええ??うええええええ?」

「輝君、意外と強引なのね?」

顔をポツと朱に染める碧さん。あ、その表情も可憐だなど思っ
ている場合じゃない。あわわわわわ……。

「じ、事故ですよね?これって事故ですよね?」

「いえ、当て逃げかな?輝君、ちょっとこっちに来てくれないかな
?」

その目は何かを狙っているような顔だった。あ、そんな意地悪そうな顔も素敵だ……って、そんなことを考えている場合じゃない！

「ほら、早く来ないと二人に言っちゃうぞ？」

「わ、わかりました。無抵抗です。両手を挙げてそちらに行きます！！投降します！！白旗です！！」

俺は両手を上げて不適に笑う碧さんのもとに向かったのであった。うう、食われそうな雰囲気だ。あ、そうそう、食われるで思い出したけど……それなら今日の朝のうちに大好きなプリンをさっさと食べておけばよかった……。今頃、おばさんか加奈に食われてしまっただろうな……。あ、そういえば昨日も俺のイチゴプリンを食べた奴がいるんだよなあ。昨日はそれで加奈と喧嘩になったっけ？

「輝君、もう一つ聞いておきたいことがあります。」

「なんですか？」

俺は正直、怖かった。……復活記念に黒河からもらったあの本が、あっさりと見つかってしまったのではないかと思ったからだ。

「……二度と、私の前から姿を消さないで？約束よ？」

いつものような天然系のぽけーっとした声ではなく、少し、思いつめたような感じの声だった。俺は伏せていた顔を上げて碧さんの顔を驚いてみる。だが、それもできなかつた……。碧さんは再び、俺を抱きしめたからだ。俺のほっぺたがかすかにぬれているのは誰かの涙だろうか？少しの間、碧さんは俺にしがみついて離れなかつ

た。

「……輝君、責めるなら、私を責めてね？きつと、一番悪いのは私なのよ……。あなたが大切に取っておいたイチゴプリンを食べたのも私。そして、今日……。悪いけど……。あなたのプリンを食べてしまったわ。」

え、何？碧さんは何をいつているんだ？プリンを食べた？ついでに俺も食べる気か？こんなに疑問文を並べる俺の頭の中にははてなが三十五体ぐらい群れをなして現れた。

「……輝君、悪いけど……。私にちょっとついてきてくれないかな？あなたに話しておきたいことがあるの。」

ついてきてと言いながら、俺の体を抱えるようにして連れ去っていく……。え、食べるなら場所もかんがえるべきということか？そして、俺は人気の少ない校舎裏に連れて行かれたのであった。

おじいちゃん！

十六、

校庭ではソフト部、野球部、陸上部などがそれぞれ青春を謳歌している。そんな中、俺と碧さんは連れ立って校舎裏へとやってきたのであった。

「……まあ、ここなら良いでしょう。」

「一体、如何したんですか？」

碧さんは愛用の白衣の右ポケットから何かを取り出した。それは、一通の手紙に見えた。ま、まさか……生徒からのラブレター？

「……輝君、実は貴方に行ってもらいたいところがあります。」

「……何処ですか？」

どつやら、この手紙を書いたのは碧さんで、その書いた手紙を俺にどこかに持っていつてもらいたいようだ。

「……『聖地』です。」

「……はい？」

俺は聞きなれない単語を耳にしてちよつと戸惑った。

「……龍の聖地に行ってもらいたいんです。」

「はあ、成る程・・・ここから遠いんですか？」

碧さんは首を振って話し始めた。

「・・・きつと輝君なら何度か行ったことがあると思います。」

ふと、思ったのだが、手紙なら郵便局にでも持っていけばいいんじゃないのだろうか？

「・・・そうですか？覚えていませんが・・・。分かりました。で、誰にこの手紙を渡してくれば良いんですか？」

そう俺が聞くと、碧さんは俺を指差して言った。

「貴方のおじいさんです。」

「え？」

俺がそのように呆けて碧さんに質問しようとしたが・・・質問できなかつた。何故なら・・・碧さんがばあちゃんが俺を爺さんのところに送った時の技の格好をしたからだ。や、やばい・・・殺される・・・。必死に避けようとしたが・・・見事俺はその攻撃を食らって意識を『聖地』に送り込んだのであった・・・。

俺が目覚めますと・・・何処かの山の中であった。

「・・・。」

見渡してみるが、木々が邪魔を試みることが出来ない。

逆立ちしてみたが、特に何もなかった。そして、もう一つ気がついたが……どうやら俺はパンツ一ちよらしい。しかも、真っ白のトランクスだ……。叫んで助けを求めたいがこの格好を誰かに見られたら嫌だ。それに、既に俺は死んでいるみたいなので……。今ごろはずかしむことはないと思うんだが……。まあ、もしもの時の為だ。

「お、輝じゃないか……。どうした、パンツしか履いてないように見えるが？」

ナイスタイミングで俺の目の前に現れたのは私のおじい様であった。あつちもあつちで何だか……。変な格好をしている。いや、宮司さんか……。確か俺の爺さんの職業は違つたと思うんだが……。まあ、それはさておき、碧さんに渡された手紙を爺さんに渡そう。

「爺さん、碧さんって人からの手紙だ。」

俺はパンツの中に挟まっていた手紙を爺さんに渡そうとしたが、爺さんは受け取るうとしなかった。そりゃそうか、男のパンツの中に入っていた手紙だもんな。

「……。輝よ、その碧さんという人は別嬪さんか？」

「あ、ああ……。綺麗な人だけど？」

「こう、見ていてぐつとくる人か？夏の浜辺にマッチした……。そんな人か？」

俺はなぜこんなことを聞くか分からなかったが、一応、正直に答えておいた。

「ああ、完璧だと思っけど……。」

「そうか、そうか……なら、手紙をもらおうじゃないか。」

俺は思う、まさかこの爺さん、男や加奈みたいな奴からの手紙は受け取らないのではないだろうか？ 爺さんは碧さんからの手紙をまるで初めてラブレターをもらう男みたいな感じで読んでいたが……途中からあんまり興味のなさそうな顔をし始め、最後のほうは俺を睨んでいた。な、なんだ……この迫力は？

「ちえ、お前のことを頼むとしか書かれておらん。ふん、だ。まあ、しょうがない。輝、こっちにおいで。」

「わ、分かったよ……で、爺さん、菜々美は元気になっているか？」

俺は話を変えようと爺さんに話したが……爺さんは更に俺を睨んできた。え、なんか俺って悪いことした？

「……菜々美は……お前さんがいなくなつて数日は泣いておつたがの……でも、今は……。」

そこで爺さんは言葉を切つて前を歩き始めた。え、何？ なんかとつても不吉な予感がするんだが……。しかし、爺さんは突然止まると、俺をひたと見据えて告げた。

「……菜々美はな、天国に……。」

そこまで聞いて俺は膝が地面についた感覚を覚えた。とうとう、成仏しちゃったか……。

「……天国に嫁に行ってしまった。」

「……は？」

爺さんはその後、俺の前で色々と話してくれた。何でも、閻魔様の息子さんのお嫁さんになったらいい……。ああ、お兄ちゃんより先に結婚しちゃうなんて……。

「……だがな、輝よ……。独りになっていい事はあるもんじゃ。よく考えてみたら独身のほうがいいかもしれん。ふっふっふっふ。」

あ、それはいい考えかもしれないなあ……。

めか

十七、

この前、爺さんが住んでいた屋敷はかなり静かであった。しかし、どうやら爺さんが毎日掃除しているらしく、意外と綺麗であった。まあ、菜々美が消えてしまっていたので少しばかり静かなのが気がかりだが……。

「……輝、碧さんからの手紙によると……どうやらお前を苦しめたびに送り出さないといけないようじゃ。」

はつきり言おう、俺は既に苦しい思いをしてここまでやってきている。これで何回目だと思っているのだろうか？

「……この山を下山すると、町がある。この前わしも知ったのだが……どうやらここは様々な生物が生きているらしい……なんでも、天国にやってきている天使などはこの世界の出身らしいのじゃよ。」

「……成る程、ここには龍以外の生命体もいるのか……他多数つてこういう意味だったのね？」

爺さんは立ち上がって何処かに行く……何かを引っ張ってきた。めちゃくちや大きな箱であった。

「この前、お前宛に送られてきたものじゃ。何でも、何処かの実験室を使って輝のおかげで何かを作れたといっておったぞ。」

そんなことを俺がしたのだろうか？とりあえず俺は箱の隣にある

手紙を読んでみることにした。

『・・・久しぶりだな、こそ泥君。あの日、私は君のおかげで全てを失ったが、龍の秘密を知ることが出来た。その後、研究に打ち込み、私なりの龍を作り出してみたのだ。神の真似事と罵っても構わないが・・・罵るのはこいつに勝手からにしてもらいたい。尚、それで命を落としてしまっても私は保証しないのであしからず・・・』

誰だこれと思ったが、何時だったか・・・加奈と一緒に何処かに行ったときに博士っぽい奴と戦ったような気がする。まあ、それは別にいいとして・・・。

「・・・爺さん、その箱を今すぐ焼却炉に捨ててくれ。」

「いいのか？もったいないと思うが？」

どうせろくなもんが入っていないのは目に見えている。俺はパンドラの箱をあける気がしないのでね・・・。

爺さんは重そうな箱を抱えて庭に捨て、マッチで火をつけ始めた。それで、スイッチが入ったのだろうか・・・メカっぽい音がして箱がいきなり開いた。

グアアアアアアアアアア！！

箱の中から銀色に光る何かが現れた。・・・なんじゃありやあ！！

「輝、時代はメカかのう？」

爺さんはマツチで火をつけるのをあきらめて俺のところに戻ってきた。そんなことを聞かれても困る。」

「・・・輝、がんばれ、あれはお前に反応しているぞ？」

赤く光る二つの目は俺を捕らえているようだ。どこからどう見てもロボットの龍は金属音をきしませて俺に襲い掛かってきたのであった。

「・・・はあ、どうやって戦えって言うんだらうか？」

「ほら、あれじゃ・・・一度思いっきり殴ってみてはどうじゃ？」

多分殴ったら痛いのは俺だ。しかも奴はなんだか色々仕掛けがあるようで・・・口をあけて何かを溜めている。

「・・・輝、今はレーザーとかビームとかそんなもんが主流なんじゃろ？」

「ああ、そうらしい。・・・爺さん、ならあの龍も口からレーザーなんて吐くかな？」

爺さんは頷いて直に俺を置き去りにして何処かに消えた。そして、残ったのは俺だけとなる。

残された俺に残った選択肢は一つ・・・特攻だ。

「白川 輝、突貫します！！」

言うが早いか俺は銀色のボディが眩しいメカ龍に突撃していった。・・・パンツーちよで・・・。

「・・・守つたら負ける！攻める！！」

俺はパンツの中に何か入っていない確認したが、特に何もなかったので・・・赤い目に向かって俺の拳をぶつけてみた。

ばりいん

あっさりと赤い目は片方つぶれた。しかし、俺の右腕からも血が出ている。だ、誰か止血をしてくれえ！！

メカ龍は何事もなかったかのように今度は鱗を俺に飛ばしてくる。え、それって反則じゃない？

「くっそう！こうなつたらこうしてやるう！！」

俺はパンツを脱いでパンツ片手に飛び上がった。どうせ誰も見えないのだから構わないだろう・・・それに、碧さんのことだ、何かパンツに仕掛けがあるかもしれない。俺はパンツを光り始めた龍の口の中に押し込んだのであった。俺としては絶対にされたくない。

ぐしやああああ！！

臭いが聞いたわけではないだろうが、龍は苦しみ始めた。俺の少ない頭では気体の温度が上がりすぎた為だと思われる。そして、龍は急にまともに喋り始めた。

『・・・後、一分で爆発します・・・』

「え？」

自爆？え、マジで？相手に勝てないからって自爆は良くない。うん、ゲルになんかなったら駄目だ。

「輝、スタンガンでも使ってその悪戯好きな悪い子を始末してしまえ！」

そういつている爺さんは既にここから姿を確認することは出来ない。爺さんに構っている場合ではないので俺は左腕から・・・人間離れの技を放出した。

「・・・秘伝、何で、金髪で背が小さい奴はツインテールが多いんだあ」！！！！

それは紫電となつて龍の心臓部分に直撃。直後、メカの動きはぴたりと止まった。どうやら、爆発阻止は成功したようだ。うん、良かった良かった・・・？メカ龍は体から煙を吹き始めた。え、何？今から再び爆発する気か？

輝へのお手紙

十八、

煙が辺りからなくなると、そこには何もなかった。

「どうやら、逃げたようじゃな。」

どこから沸いて出てきたのか爺さんは俺の隣でそんなことを言っている。俺としては再び襲ってこないか非常に気になる。

「まあ、そんなことより、早く息を吹き返さないとお前も危ないと思うぞ？この前みたいにずっとこっちにいると火葬される可能性もあるしな……。今回はトラブルがあつたことを碧さんとやらに一応報告しておいたほうが良さそうじゃからな。」

「……そうだな。じゃあな、爺さん。」

俺はとりあえず爺さんに右腕を上げて挨拶をした。左手は隠すものがなくなった股間を抑える役を買って出ている。

俺は目を閉じるとそのまま意識が遠のいていくのを感じた……。

目が覚めるとそこは保健室の一つのベッドであつた。どうやら、あれから碧さんが死亡届を出さずに保健室に搬送してくれたらしい。……よかった。しかし、近くに誰かがいる気配などない。外はそろそろ夕暮れである……。

「……帰ろう。」

一人さびしく俺は下駄箱を開けると……そこには何かが入っ

ていた。俺は不思議に思っただけを取り出して裏返したり日に当ててみたり・・・逆立ちしてみても・・・こ、これはまさか・・・

「ラ、ラブレター？」

驚いて声も出せねえ。いや、叫んでいるのだが・・・そ、それにまだこれが本物かどうか分からん。もしかしたら黒河のやつからの悪戯心満載の一品かもしれない。

「お、白川じゃないか？」

しかし、奴は俺の後ろから・・・あれ？以前あったときよりかなりやせている気がするのはいかんな？

「黒河、顔色が悪いけどどうかしたか？」

「・・・まあ、僕のことはいいから、君が手に持っているのはなんだい？」

そういつて俺の手からラブレター？を取り上げて勝手に開封。

「・・・今度の日曜日、駅前で1/144ストライク リ ダムを持って待つてますう？おいおい、デートのお誘いじゃないか！全く君って奴は・・・。」

「嘘・・・お前の悪戯心満載の一品じゃないのか、それ？」

黒河は首を振って俺宛の愛の手紙をくしゃくしゃにして後ろに放り投げた。

「僕の今度の日曜日の予定はだね、あの双子ちゃんのお相手だよ。白川、かわってくれないか？」

「却下。お前を好いてくれるいい双子じゃないか！お幸せにな。」

そういつて俺はくしゃくしゃになった手紙を大切に胸ポケットの中に入れて黒河の隣を神速で駆け抜けて家に帰ったのであった。これでどんなことがあっても一緒だよ？たとえ狙撃兵から胸を撃たれてもあの世に記念として持っていこう。

「・・・ううむ、羨ましい・・・あれ？恋文の欠片かな・・・！なんだ、そんなことか。」

と、黒河の声が聞こえた気がしたが気のせいだろう。俺は家に帰りつくともいないことを確認してくしゃくしゃになってしまった手紙の内容を確認した。黒河が言ったとおりのことしか書かれておらず宛名は不明。誰が出したかは分からない。と、そんなことを頭の中で言っていると、加奈が二階から降りてきた。

「輝、顔がにやけてるけどどうかしたの？」

「へへえ、どうかなあ・・・気のせいだよ。」

なんだか昇天したときのきもちだあ。あははあ・・・。

「うわ、気持ち悪・・・。」

そういつて加奈は俺の目の前から姿を消してしまったのであった。へ、どうせ俺は気持ち悪いですよおだ！だけど、そんな俺をデート

に誘ってくれる人もいるもんだねえ。夕食時、帰りが遅いおじさん
抜きのみんなで夕食をとっていると、おばさんが俺に話しかけてき
た。

「輝、今日はなんだかご機嫌だねえ。」

「ええ？わかります？実はですねえ・・・」

「いや、別に聞きたくないから黙ってていいわよ。」

加奈がそんなことを言うので俺はこれ見よがしとラブレターを見
せ付けてやった。しかし、みんなの反応はそれほど驚いているとは思
えない。

「へん、ラブレターなんて安い安い。どうせろくな男たちなんてい
ないからね。」

「そうですねえ、私も結構持ってますし・・・。」

「私もですよ。輝君、そういうのは自慢しないほうがいいですよ。」

碧さんにそういわれたので俺はそれを引っ込めようとしたが・・・
一瞬で黒い墨となってしまった。

「・・・加奈、羨ましいからって何も雷落とすことないんじゃないか
いかに！」

「ニヤニヤしてるから気持ち悪くなっただけよ。別にうらやましく
なんてない！」

加奈はそういいながら突き出した俺の顔面に右ストレートを繰り出してきた。俺はそれをぎりぎりですべて避けてそのまま殴り合いに発展・
隣りの和室でもみ合いの喧嘩となったのであった。

「輝、胸触らないでよ！」

「へ、これが胸だって？笑わせてくれるわ！」

そして、俺たち抜き夕食では葵がやけに嬉しそうに夕食を食べていた。それを見ておばさんは言った。

「葵、よろしく頼むよ？」

「ええ、任せて置いてください。明日は輝さんと一緒に楽しんできますからね。えへへっ、明日が楽しみですねえ。」

輝へのお手紙（後書き）

何と無く、久しぶりの更新です……。そろそろ、新きやらでも出そうかいや、どうかなあと思んでいるところです。まあ、出すとしてもこゆるいやつじゃないと輝達に対抗できない気がしますから……。たまに、感想なんかをいただけるとうれしい所存です、ハイ。

龍と書いてなんと呼ぶ？ ~他多数~

デート？

十九、

そして、昨日から見たら今日、明日から見たら昨日がやってきた！俺はとりあえず駅前に行くことにした。既に手紙がないので予定時間が書かれていなかった手紙を見ることなく、早めに家を出た。駅前に行ってみると・・・多くの子供連れや俺と同じように待ち合わせをしている連中が結構いた。ううむ、確かに何か目印がないといけないかな？

「・・・お！あれかな？」

俺から見てもちょうど右のほうに当たるベンチに目印を持っている女の子がいた。青い服を着ていて帽子をかぶっている。ちょうど防犯カメラが隠れているので顔は確認できないが・・・なんだか何処かであった気がするような感じがした。

「あ、あの・・・君が俺の下駄箱の中にラブレターを入れた人かな？」

「ええ、そうです、輝さん、今日は一日よろしくお願いしますね？」

顔を上げた女の子は葵であった。俺は声も出せない。しかし、考えてみたらあの三人の中に犯人がいてもおかしくなかったかもしれない。

「・・・。」

「そうですか？なら、観覧車に乗りませんか？」

有無を言わず葵は俺を引きずって観覧車に乗せた。因みに言うておくが観覧車も駄目だ。特に、今日みたいに風の強い日にこんなものに乗ったら生きている心地がしない。

「……輝さん、そんなに近づいて何かエッチなことを考えてません？」

「……コワイコワイコワイ。」

俺の口から漏れる本当の恐怖を感じたのか葵は俺の頭に手を乗っけた。

「全く、高所恐怖症だったんですか？」

「いや、そんなんじゃないよ。高いところは大丈夫。だけど、こう、揺れる奴は駄目。」

我ながら情けない声を出しながら俺はしっかりと葵にしがみついた。

「……私は輝さんの意外な一面が見れて嬉しいですよ？」

葵はそういつて不安顔の俺に微笑んでくれた。少しだけ、心を落ち着かせることが出来た。

観覧車は俺が神様に願っていたからか無事に一周したのであった。隣の葵の顔は頼りがいがあったほっとする。

「次は何に乗ります？これですか？それともこれ？」

パンフレットを指差す葵だが・・・どれも絶叫マシンだ。ふ、葵よ・・・俺を仕留めにかかる気だな？

「冗談です、ちょっと休憩しますか？」

「ああ、休憩しよう。」

俺と葵は近くのベンチに座ってクレープを買って食べ始めた。近くではヒーローショウが開催されている。

「・・・葵は遊園地に来るの初めてか？」

「ええ、初めてです。まあ、私が知っているのはあの橋の下ぐらいな物でしたからね。輝さんは何回目ですか？」

俺は葵にそう尋ねられて記憶をたどってみることにした。・・・どうやら、初めてくるようだ。

「俺もはじめてみたいだな。小さいころに行った記憶が全くない。」

「え、そうなんですか？輝さんみたいな遊び人なら結構来てるって思ったんですが・・・。」

遊び人とは失礼な・・・こう見えても俺は平凡な日々を有意義に使おうと努力しているのだよ。うん、友達に全て彼女がいたんで遊び相手はゲームかおばさんの家で飼っている犬だけだったな。そういえば、犬の姿が見えないけどどうかしたのかな？

「輝さんって、もてないんですか？」

何気なしに葵にそういわれ、俺の心はビームで撃ち抜かれたように深い傷を負った。

「もてません、これまで女の子と話したことは片手で数えるくらいです。ハイ……。」

俺と葵がそんなことを話しているとヒーローショーは佳境にはいったようだ。悪役が観客の中から誰かを人質にしようと選んでいる。あたりを見渡していると誰かに狙いをつけたようだ。少女を二人もステージの上に乗上げた。

「きゃー、助けてえ!!!」

二十、

その二人は再び、叫び声を上げた。

「きゃーたすけて、兄様!!!」

その声に聞き覚えがあった俺はステージのほうを見た。葵も聞き覚えがあったのかステージのほうに視線を移す。

「何だ、あの二人か……。」

俺の視界に映ったのは黒河好きの双子であった。そして、その双子が見るほうには黒河がこれ見よがしに俺たちを発見して近寄ってくる。

「やあ、偶然だね……。白川、葵ちゃんとデートだったのか？」

「へん、お前だってあの双子じゃねえか。ほら、先程から助けを呼んでいるぞ?」

ステージのほうからは黒河に置き去りを食らっている双子がこつちを向いて助けを求めている。なんだか本気のようにヒーローも悪人も困っているように俺には見える。どうやら、黒河と一緒にいてもいいことはなさそうだ。

「葵、そろそろ次、行こうか？俺たちが邪魔しちゃ悪いよ。」

「・・・そうですね。」

「し、白川・・・僕を見捨てるのかい?」

「見捨てる？なあに言ってんだ！両方ともお前にぴつたりだ。ほら、行って助けてこい。待ちきれなくなったのかあの二人が凄い業そうしてこつちに走ってきてるぞ?」

俺が冗談でそういうとあわてたあいつはステージのほうを向いた。その隙に俺は葵の手をとってその場から脱出したのであった。

「はあはあ・・・ここまで来ればさすがの奴でもついてこれまい。」

「まあ、邪魔されたら大変ですからねえ。せつかくのデートですから・・・。」

にこりと笑った葵の後ろに何処かを見た二人がこつちを見ている。いや、正確に言うなら一人と一匹か？

「輝、鼻の下を伸ばしてるんじゃないよ。」

龍と書いてなんと呼ぶ？ ~他多数~

「ばっへばっへ……。」

おばさんと家にいる犬だ。補足として言うておくが犬のほうの名前はホワイティーンという。何故、犬の名前がこんな名前かというと……ホワイト・パンティー・モンモン（因みにこれは爺さんが名づけたらしい）を略したものだ。

「じゃ、そろそろ帰ってきてくれないかな？ 今日から私はちょっと用事があるからね……。」

「ばっへばっへ……ふん！」

そういつておばさんは俺たちの目の前から消え、ホワイティーンも瞬きした瞬間に姿を消した。……あれ、本当に人間と犬なのだろうか？

「……じゃ、そろそろ帰りましょうか、輝さん。」

少しばかり残念そうな顔で俺を見る葵。……ま、おばさんが言ったんだからしょうがないか。

「葵、久しぶりにあの橋の下にでも行ってみよう。……そこに行ってから家に帰ろうぜ？」

葵はそれを聞いて道端で巨大ザリガニを見たような顔になったが、
・直に頷いて俺の腕にしっかりと巻きついたのであった。俺は苦笑しながらもそのまま一緒に歩き出したのであった。

「……輝さん、やっぱり貴方は優しいんですね？」

「へ、俺が優しいなんていう奴は頭がおかしいよ。ま、考えてみれば俺にラブレターをくれる人間なんてそうそういないし……俺もいい経験になったよ。」

俺は葵の頭をぼんぼん叩いて遊園地を出たのであった……。
こうして、俺と葵のデートは幕を閉じたかのように思われたのだが……。

「輝さん、あれ見てください！」

葵と会った端の下……そこには一人の老人が倒れていた……。

「……まさか、爺さんか！」

俺は急いで倒れている老人のもとに駆けつけて抱き起こした。その顔を見て俺が呟いたのがあたりだと知った。

「……輝、出来れば男じゃなくて女の子が良かった……ふ、久しぶりの娑婆じゃったんじやが……運が悪かったのじゃ……娑婆に会ってこの有様じゃ。力を全て使い終えてしまったわしは……消えるんじや。」

そういつて爺さんの姿は消えてなくなってしまった。……何しに出てきたんだ？

「あれが輝さんのおじいさんですか？」

「ああ、スケベな爺さんでな……今回は何しに出てきたんだ？しかもさっさと退場してしまっただし……。」

二人して首をかしげながら考えていると……川から何かが出てきた。

「あ、輝さんあれ！」

「……って、あれは……。」

俺と葵の目の前に現れたのはとてつもなくでかい白龍であった。うるこは既にくすんでおり、老龍という言葉がしっくりしていた。

ぎしゃあああああ！！

咆えるたびに何かが止まる気がする。俺の頭の中でも何かが始まっていく……と、そんな咆哮も数分したら止まった。

俺の目の前で、川の流れはなくなっていた。雲も動いておらず、跳ねた魚は空に浮かんでいる。

「……これは一体？」

「どうなっただんでしょかね？」

動いているのは俺と葵だけだ。いや、目の前にいる老龍は怒ってますといったオーラを出しながら俺たちに襲い掛かってきたのであった……。ピンチ？

デートwith葵

二十、

その二人は再び、叫び声を上げた。

「きゃーたすけて、兄様!!」

その声に聞き覚えがあった俺はステージのほうを見た。葵も聞き覚えがあったのかステージのほうに視線を移す。

「何だ、あの二人か・・・」

俺の視界に映ったのは黒河好きの双子であった。そして、その双子が見るほうには黒河がこれ見よがしに俺たちを発見して近寄ってくる。

「やあ、偶然だね・・・。白川、葵ちゃんとデートだったのか？」

「へん、お前だってあの双子じゃねえか。ほら、先程から助けを呼んでいるぞ？」

ステージのほうからは黒河に置き去りを食らっている双子がこっちを向いて助けを求めている。なんだか本気のようにでヒーローも悪人も困っているように俺には見える。どうやら、黒河と一緒にいてもいいことはなさそうだ。

「葵、そろそろ次、行こうか？俺たちが邪魔しちゃ悪いよ。」

「・・・そうですね。」

「し、白川・・・僕を見捨てるのかい？」

「見捨てる？なあに言ってるんだ！両方ともお前にぴったりだ。ほら、行って助けてこい。待ちきれなくなつたのかあの二人が凄い業そうしてこつちに走ってきてるぞ？」

俺が冗談でそういうとあわてたあいつはステージのほうを向いた。その隙に俺は葵の手をとってその場から脱出したのであった。

「はあはあ・・・ここまで来ればさすがの奴でもついてこれまい。」

「まあ、邪魔されたら大変ですからねえ。せつかくのデートですから・・・。」

にこりと笑つた葵の後ろに何処かで見た二人がこつちを見ている。いや、正確に言うなら一人と一匹か？

「輝、鼻の下を伸ばしてるんじゃないよ。」

「ばっへばっへ・・・。」

おばさんと家にいる犬だ。補足として言っておくが犬のほうの名前はホワイトインという。何故、犬の名前がこんな名前かというと・・・ホワイト・パンティー・モンモン（因みにこれは爺さんが名づけたらしい）を略したものだ。

「じゃ、そろそろ帰ってきてくれないかな？今日から私はちょっと用事があるからね・・・。」

「ばっへばっへ……ふん！」

そういっておばさんは俺たちの目の前から消え、ホワイティーンも瞬きした瞬間に姿を消した。……あれ、本当に人間と犬なのだろうか？

「……じゃ、そろそろ帰りましょうか、輝さん。」

少しばかり残念そうな顔で俺を見る葵。……ま、おばさんが言っただからしょうがないか。

「葵、久しぶりにあの橋の下にでも行ってみよう。……そこに行ってから家に帰ろうぜ？」

葵はそれを聞いて道端で巨大ザリガニを見たような顔になったが、……直に頷いて俺の腕にしっかりと巻きついたのであった。俺は苦笑しながらもそのまま一緒に歩き出したのであった。

「……輝さん、やっぱり貴方は優しいんですね？」

「へ、俺が優しいなんていう奴は頭がおかしいよ。ま、考えてみれば俺にラブレターをくれる人間なんてそうそういないし……俺もいい経験になったよ。」

俺は葵の頭をぼんぼん叩いて遊園地を出たのであった……。こうして、俺と葵のデートは幕を閉じたかのように思われたのだが……。

「輝さん、あれ見てください！」

葵と会った端の下・・・そこには一人の老人が倒れていた・・・

「・・・まさか、爺さんか！」

俺は急いで倒れている老人のもとに駆けつけて抱き起こした。その顔を見て俺が呟いたのがあたりだと知った。

「・・・輝、出来れば男じゃなくて女の子が良かった。・・・ふ、久しぶりの娑婆じゃったんじゃが・・・運が悪かったのじゃ・・・娑婆に会ってこの有様じゃ。力を全て使い終えてしまったわしは・・・消えるんじゃ。」

そういつて爺さんの姿は消えてなくなってしまった。・・・何しに出てきたんだ？

「あれが輝さんのおじいさんですか？」

「ああ、スケベな爺さんでな・・・今回は何しに出てきたんだ？しかもさっさと退場してしまったし・・・。」

二人して首をかしげながら考えていると・・・川から何かが出てきた。

「あ、輝さんあれ！」

「・・・って、あれは・・・。」

俺と葵の目の前に現れたのはとてつもなくでかい白龍であった。うろこは既にくすんでおり、老龍という言葉がしっくりしていた。

ぎしや あああああー！！

咆えるたびに何か止まる気がする。俺の頭の中でも何か止ま
っていく……と、そんな咆哮も数分したら止まった。

俺の目の前で、川の流れはなくなっていた。雲も動いておらず、
跳ねた魚は空に浮かんでいる。

「……これは一体？」

「どうなっただんでしょうかね？」

動いているのは俺と葵だけだ。いや、目の前にいる老龍は怒って
ますといったオーラを出しながら俺たちに襲い掛かってきたのであ
った……。ピンチ？

龍と書いてなんと呼ぶ？ ~他多数~

デートwith葵（後書き）

皆様、お久しぶりです。いやあ、いろいろありましてちょっと更新するのが遅くなってしまいました。やれやれ・・・まあ、ちょっと不甲斐無いです。が、これからもがんばっていきたく思っているので、たまにはがんばれよていどの応援をお願いしますと思います。

新たなる旅立ち

二十一、

人は、恐怖を目の前にしたらどうなるのであろう・・・まあ、それが俺の場合であつたら次のようになる。

「葵、お手上げ。」

俺たちの目の前に現れた謎の老龍。何処かで見たとような感じがするのだが・・・どこだろうか？ううむ、脳年齢が衰退しているかもしれん。

「輝さん、諦めないで頑張ってください！」

「駄洒落か？まあ、話し合いで解決しよう。」

過去一度、とある龍に襲い掛かった結果、俺は昇天した記憶がある。それ以降、雷がちよつとばかり怖くなつちまった。

「あゝ、俺と隣にいる人物は貴方に危害を加えようとは一ミリも考えておりません。どうか、見逃してくれませんか？」

老龍は俺をじろつと見て首を振った。交渉決裂。いや、まだだ、こんなことでやられてしまったらいつもの二の舞だ。ここは食いついていかない・・・。

「なら、葵だけならいいですか？」

龍は首を縦に動かした。・・・よし、後は時間を稼ぐだけだ。

龍と書いてなんと呼ぶ？ ~他多数~

「輝さん……。」

俺は近付いてきた葵の耳元でこういった。

「いいか、急いで家に帰って碧さんと加奈を連れてくるんだ。出来るだけ早いほうが俺の生存率が高くなるからな……。」

葵が頷いて走り去っていくのを横目で見送ってから、俺は龍から少しばかり距離をとった。だって、あんな巨体が倒れてきたら一発で終わるんだもん。

『さて、邪魔者もいなくなったからはじめようかね？』

「え？」

瞬きした瞬間に龍は姿を消していた。そして、俺の目の前にはあちゃんがいた。その両手には真剣が握られているように見える。

「ば、ばあちゃん……よく切れそうな包丁だね？」

「輝、ぼけてる時間はないよ。さあて、どのくらい強くなったのか見せてもらおうか？」

突っ込みなしですか……。まあ、そんなこんなで老龍はばあちゃんだったのだ。これで爺さんが近くに倒れていたことも納得がいく。爺さん、助けて……。

俺は絶望感に打ちひしがれながらも大地を蹴って跳躍した。無論、相手が相手なので生きて帰ることはないだろう。

どすつと音がして俺の肩に何か突き刺さった。痛くはないが力

が抜けていくのをしっかりと確認することが出来る。このままでは・・・この前とおなじ展開になってしまおう・・・くそ、俺じゃどうすることも出来ん。やっぱ、お手上げ・・・。

「・・・爺さん、俺に力を貸してくれ!!」

俺は出てくるはずもなからう、爺さんと呼んだ。今頃、コタツに入って震えているに違いない。だが・・・。

「輝、急いで離れるんじゃ!!」

爺さんの声がしたかと思うと・・・俺は誰かに引つ張られた。

「輝さん、しっかりとしてください。」

倒れたときには既に力が残っておらず、首を動かすことも出来ない。しかし、俺は目の前の光景が信じられないでいた。なんと、爺さんがやってきたのだ。

「・・・輝よ、短い間世話になったな。」

「ま、全く世話はしてないけどな・・・。」

「とりあえず、この化け物はわしがどうにかする。じゃあまたな・・・。」

爺さんとはあちゃんはともに姿を消した。残ったのはあちゃんが落としていった二本の剣であった。地面に突き刺さっており、それが何よりの証拠であるといった感じである。

「輝さん、顔色が悪いですよ？」

「輝！大丈夫？」

「輝君……。」

俺の目の前には心配そうな三人の顔があっただが……もつと近付いて確認しようとして……俺は意識を失った。誰かの声が幾度となく、聞こえて気がしたが……おれは睡魔に勝つことなどできることもなく、目を開けなかった。

目が覚めると、そこは爺さんがいる場所であった。しかし、俺の体はベッドにしっかりと固定されており、体中包帯だらけである。はい、お約束のミイラ男です。

「輝、すまん……抑えようとしてこのざまじゃ……。」

そして、隣のベッドにはあらゆるところを骨折したようなミイラ男が座っていた。俺より凄まじい……。

「爺さん、ばあさんはどこに行っただ？」

「……地獄に向かった。なんでも、菜々美の夫を見に行くといっておった。当分は平和に過ごせるぞ……。まあ、体がこうだから動くことは出来ないんじゃないか……。」

どうやら、爺さんはばあちゃんに一撃も与えることなく撃沈したらしいな……。

「ああ、輝は別にどこを怪我したわけじゃないんじゃないよ。秀困気で

させてもらった。」

「……そうかい。」

「因みに、今頃お前さんの肉体は集中治療室じやろう。ま、お前さんの体が大丈夫になるまで、碧さんの言われたところに向かうといい……。ほれ、地図じゃ。わしがわざわざお前のところに行つて渡そうとしたんじゃないがな、途中、絶世の美女に会つたので声をかけたらちよつどあの化け物が姿を現したのじゃ。」

え、それって爺さんが悪いんじゃないの？自業自得だろうに……。

「ま、わしとしては今回は善戦したつもりじゃ。それにな、わしがかつちにやつてきたとき、お前さんにはお客が来ておつたぞ。道場にいるからな。」

他多数さん一人目

二十二、

俺は包帯をはずしてから道場へと向かった。今回はきちんと服を着ているので助かった。

「やあ、久しぶりじゃないか？」

俺の目の前にいるのは白衣を着た危なそうな博士であった。

「……誰ですか、あんた？」

「ふ、そんなことを言うのか……まあいいだろう、お前に名乗る必要もないからな……いでよ、『機龍0号機・改』」

謎の博士の後ろから……その物体は姿を現した。銀色に輝くボディ、赤い光を発する眼光……そして、背中にはカッターがついている。

「どうだ、これが君に倒された0号機の改良型だ！ふははは、存分に苦しむが良い！」

俺は何か恨みを買っようなことをしてきたであろうか？近頃、命ばかり狙われている気がする。それとも、俺の被害妄想であろうか……。

「……とりあえず、そのメカの説明でもしてくれないか？ほら、お約束だろ？」

「む、そうだな。コホン、ええ・・・では、この『機龍0号機・改』とは、先の戦闘でぼろぼろにされてしまった機龍に感情を埋め込み、自爆装置をはずすことによって考えることが出来るいい子になったのだ！しかあし、何故だか知らないが騎士道精神に目覚めてしまい、弱者を助け、強者を挫く性格となつてしまい、ぶつちやけ、悪者の私には牙を向いてばかりだ。全く、飼い犬に手を噛まれるとはこういうものだ。まあ、それはいいとして、サーチ機能を向上させ、戦闘用というより、サポートが得意となつてしまったこいつのために、私は新しい機龍を作ろうと思つたのだが、時間がなかったので、私も戦うことにしたのだあ！！」

長い、長い説明だった。まあ、これで弱点は分かった。俺はささと笑っている謎博士のみぞおちに拳をめり込ませた。動かなくなつたそれを近くに立っているメカに任せる。

「・・・ええと、言葉わかるかな・・・まあ、気がついたら爺さんに言っておいてくれ。」

俺はそういつてその場を後にした。無論、もうこんな変人と会いたくないからである。それに、こんなばかでかいメカとも一緒に居たくない。だって、無機質なその目は何を考えているのかさっぱりわからないんだもん！！

しかし、どうやら・・・その場を後にできなかつたようだ。何故なら、奴のあごは俺の頭をあまがみしているからである。いや、手加減してくれているつもりかもしれないが・・・痛いねん。

「・・・わかつた、何か言いたいの分かるから噛まないでくれ。」

鉄の化け物にさういうと、理解したのか俺の頭から離れた。その牙に赤い絵の具のようなものがついてるのは俺の気のせいだろう

龍と書いてなんと呼ぶ？ ~他多数~

か……。

ぎしゃしゃしゃ……

メカ龍は何かを言っている。

「わからん。日本語喋ってくれ。俺はまだ、外国語は全然覚えてないんだ。」

そういうと、メカ龍は煙を噴出した。そして、その煙が消えると……お約束として……銀髪の女の子がそこに姿を現していた。名残としてだろうか……目が紅く、どことなく怖い。

「……貴方を私のマスターとして登録しました。」

「はあ、そうですか……。」

「……。」

「……。」

俺は黙り込んでしまったメカ龍と同じように黙り込んだ。さて、なんていったんだろうか……。

「御命令を、マスター。」

「待った、何でお前のマスターが俺なのか説明してくれ。話はそれからでも遅くないはずだ。」

「了解。」

「コホンと咳をして、彼女は言った。

「・・・私は、貴方のようなマスターを探していたからです。これで、充分ですか？」

「いや、全然・・・。ま、いいや・・・。俺は頷いて右手を差し出した。

「よろしく頼むよ・・・えーっと、名前はなんて言っただ？」

「固有名称は特になし。どうぞ、名前を決めてください。」

「へっへっへ、こういうときのために俺は色々考えていたのだ！」

「じゃ、紀伊きいなんてどうだ？」

「仰せのままに、マスター。」

「こうして、俺と紀伊は握手をしたのであった。まあ、これからどうなるかは分らんが・・・。」

「マスター、これからどうするのですか？」

「とりあえず、俺の体が戻る状態になったら戻るとして・・・それまでは爺さんに教えてもらったところに行こうと思うんだ。」

「了解しました、マスター。これより、コードネーム『M・G』(マスター護衛)を開始します。」

そういつて紀伊は俺の背中に引っ付いた。あ、弾力のある何か
背中に当たって気持ちいい・・・ま、誰しも間違いはあるさあ！

「・・・・・・・・何の真似でしょうか？」

「護衛です。こうしておけばいつでもマスターを助けられます。」

まあ、紀伊の体重が軽くて助かった。俺は特に何を持っていけば
いいのかわからなかった。そのままたま外に出て歩き始めたのであ
った。

さて、目指すはここをくだってすぐだろうと俺は甘く考えていた。
だが、人生というもんはそこまで甘いのが好きではないらしい・・・
。

きらきら光る黄金の・・・

二十三、

一歩一歩歩くごとに・・・俺の背中に陣取っている危険察知機は俺に忠告してきた。

「マスター、もう少し慎重に行動してください。このエリアには生命体ではないものが多数、確認できます。」

お前もその一人だろうがと思ったが、紀伊は親切心でそういつてくれているので突っ込みはなしだ。まあ、どうせ突っ込んでも機械だろうから意味がないだろうが・・・。

「大丈夫です、突っ込まれたら何とか対処してみますから・・・。」

どうやら心が繋がっているらしい・・・。俺が何を考えているのかも筒抜け。心のプライバシーというものももっと、尊重してもらいたい。何考えたって自由だ。それを実行したら色々と問題がありそうだが・・・。

「マスター、何を考えているんでしょうか？」

「いえ、何も・・・。」

俺はさっさと歩き始めた。一向に紀伊は降りてくれないし・・・まあ、いいか。空は青空、鳥の鳴き声も先程からずっとしている。

げばばばばばー！

俺の目の前をなんだかとってもおかしい何かが飛んでいった。それは鳥と形容しがたいもので・・・簡潔に言うなら化け物、怪鳥、馬鹿鳥。のいずれかに当てはめることが出来ると思う。俺の知っている世界には羽が四枚もある金色の鳥は居ない。

「紀伊、あれ何？」

「鳥じゃないんでしょうか・・・。非常にこっちに敵意をむき出しているのが分かります。」

その目は猛禽類に似ており、鋭利な爪は車だろつが、象だろつが、あつという間に串刺しに出来るに違いない。

「マスター、どうしますか？逃げます？」

「よし、回れ右して逃げよう。無理をするのは良くないからな。」

「了解。」

俺は回れ右して逃げることにしたのだが・・・あつちのほつが早かったらしい。回り込まれてしまった。

「マスター、回り込まれましたよ？」

「く、こうなったら援護は頼んだ。」

「了解。」

逃げる 失敗 戦う。すばやさの低いパーティーの王道的な結末とりあえず、そこいらに落ちていた木の棒を拾って自分の体調よ

りでかい獲物に襲い掛かってみた。直後、俺の体は怪鳥の体にぶつかっていた。

「マスター、援護はどうですか？」

「痛いわ、ぼけえ！！どこの誰が仲間に攻撃するんだ！！背中に当たったじゃねえか！！」

「よかったですね、マスター、実弾じゃなくて……。」

少しばかり反省の色が見えているのが良かったであろう……俺の体に当たったのはそこら辺に転がっている中くらいの石であった。おかげで俺の背中には絶対におかしな傷がついているに違いない。

とりあえず俺は振り落とされないように金色の羽にひつついて羽部分を叩いてみた。

ぎゃああああ

急に飛び上がり、空を飛び始めた。く、なんとなく、遊園地に行ったときのジェットコースター気分を味わっているような気がしないでもない。胃から何かがこみ上げてくるような感じが……おえっぶ。

「……マスター、頑張ってください！！私が貴方をサポートします！！」

地上から、嬉しいことを言ってくれているのだが……悪い、そういうのは俺の意識が悪者にでも乗っ取られたときに言ってくれ。それと、出来れば宵止めでも投げってくればよかったんだが……。

「おえええええ。」

俺はたまらず、モザイクのかかったものを黄金に輝く鳥の背中に吐き出してしまった。それは、熱を帯びており、空を飛んでいた鳥も異変に気がついたらしい……。

一瞬、黄金に輝く鳥は動きを止めた。その瞬間をサポートしてくれるといった紀伊は見逃さなかった。

「……標的、確認！投石、発射！！」

下から物凄いスピードで飛んできた石は……鳥の腹に直撃。鳥は断末魔の悲鳴と俺を連れて地上へ突撃……墜落した瞬間に俺は背中から振り落とされた挙句、近くの木に衝突した。

「あててて……。」

見事に頭から直撃してしまった。ふ、モテナイ顔が一段と醜くなつちまつたぜ。そろそろ、自主規制でも掛けておいたほうがいいかもしれない。

「マスター、大丈夫ですか？」

「いや、駄目だな。俺はもう、モザイクを掛けたほうがいい。」

「？何言ってるんですか……。」

首を傾げる紀伊を放っておいて、俺は墜落した鳳凰といつてもいい黄金の鳥に駆け寄った。なんか、黄金の鳥って言う……バーベキューに必要なあれを思い出してしまった。

龍と書いてなんと呼ぶ？ ~他多数~

「・・・マスター、この鳥をどうしますか？」

ぐったりとして動かない鳥を見ながら紀伊は俺に尋ねてきた。

「そつだなあ、ま、汚物（原産地は俺の胃袋）だけは綺麗にふき取っておかないと・・・それと、傷の手当だけはしておかないとな。」

俺がそう言うと、紀伊は笑って頷いたのであった。

輝の新たな苦悩の始まり？

二十四、

汚物を綺麗にふき取り・・・ふき取ったのは俺のシャツを引きちぎってタオルの代わりに使った。おかげで、俺のシャツは上半分となくなってしまった。アンダーシャツを着ているので露出はしていない。

「さて、怪我也奇跡的にしてないみたいだし・・・行こうか？」

「了解、マスター。」

そして俺は紀伊と二人で鳥がいなくなった道を歩き始めたのだが、ふと、指を鳴らして振り返ってみた。

「金色に光っている毛なんて珍しいから記念に貰って行こうっと。」

「大丈夫なんですか？マスター。」

俺はそんな紀伊の忠告も聞かず・・・鳥の尻辺りの毛を一枚失敬した。その毛をポケットに入れてさあ、出発進んだと紀伊のほうへと振り返ったのだが・・・。

「・・・マスター、今、その鳥動きませんでした？」

「・・・え？」

後ろを振り返ってみると、鳥は動き出した。ただ、動き出した拳句に目も開けられないほどの光を発したのであった。

「うわあ！」

二人して目を塞いだのだが、次の瞬間には既に光は消え去っていた。そして、鳥も消えており、俺たちの目の前に倒れていたのは少女であった。

「……マスター。」

「知らん。俺は何も知らん。」

この場はさつさと退いたほうがいいと思ったのだが……何故だか、足が動かない。

「のわあぁっあぁ!!！」

足を見るとその少女がいつの間にか掴んでいたのであった。化け物？

「……。」

その少女は俺を見上げ、何かを訴える視線を投げかけている。しかし、俺には読心術というものがなく、その視線を避けようとがんばってみたのだが……無理であった。結局、尋ねてみることになった。

「あの、何か御用でしょうか？」

「あの……私の体から羽を抜きましたよね？」

今にも泣き出しそうな顔になり、辛そうだ。俺はどうしたものか

と悩んでいると、正直者であろう、紀伊が答えてしまった。

「ええ、マスターは貴女のお尻辺りのところから抜いてましたよ？」

途端、その少女は泣き始めてしまった。

「と、とりあえず・・・なんで泣いているのか教えてくれませんか？」

「ぐすつ、私たち、鳳凰鳥族は一枚でも羽を取られてしまえばあつという間に力を失い、弱体化してしまいます。普段だったら取れないはずなんですが・・・取れてしまったものはもう、戻りません。」

俺は手元に握った金の羽を取り出して戻そうかと提案したが・・・

「だって、お尻のところから取ったのでしょうか？今更、恥ずかしくて出来ませんよ。」

もつともな事を言われてつい、頷いてしまった。うん、そんなことを俺がしてしまったら警察に捕まるだろう。

紀伊はそんな少女を見て涙を浮かべていた。

「ぐすつ、マスターは血も涙もない鬼畜ですね。」

「お前には言われたくないぞ。」

「いいです、元に戻る方法を私たちが探してあげます。マスター、いいですよね？」

いいも何も、悪いのは俺だ。しかし・・・

「なんだっでここを守っていたんですか？」

「それはですね、私がこの土地の守護者の一人だからです。この土地には他にも守護獣という者がいて、この土地を守っているのです。まあ、この先にも色々といいますが・・・」

それはやばそうだ。しかし、この先に行かないと聖地とやら似つかないのならばしょうがない。どうせ俺の本体も未だに回復していないに違いない。

「グダグダ考えていたって始まらない。あたって砕けちってしまえだ！行くぞ、紀伊！」

「了解、マスター！」

紀伊は立ち上がったのだが、もう一人は立ち上がっていない。俺は不思議に思っで尋ねてみた。

「だっで、名前を呼ばれていません。こっういっうのは名前を呼んでもらうのが必要かと、私は思っうのですが・・・。」

ううむ、そんなものだろうか・・・だが、俺はこの少女の名前を知らない。

「名前はなんていっうんです？」

「さあ？忘れまっした。それに、名前なんて覚えてまっせんよ。貴方がっつけてくれっで結構です。」

さて、ここでまた名前をつけてあげなくてはいけないなんて・・・
・機械から紀伊と付けたし・・・鳥だからなあ。即効性で決めるな
ら・・・

「じゃ、今日から君は小鳥でどうだ？」

「小鳥・・・ですか？うれいす。ありがとございます、マス
ターさん。」

命名理由、小鳥っぽいからだ。性格といい、声といい、体とい
い（人型のほう）・・・。

こうして、俺のこっち側の友達として、機械のほかに鳳凰とい
うお友達が増えたのであった。このままいけば、なんだか他にも出
きそうであり・・・なんだか今から名前を考えておいたほうが
いいなと思う俺であった。

もしもし亀よ？

二十五、

俺の背中に引っ付いたまま、紀伊は後ろからあーだのこーだの話しかけてきており、小鳥は俺の隣で色々とまるで鳥のように話しかけてきていた。く、うるさいことこの上ない。

「あ、マスターさん、気をつけてくださいね？確かこの辺に……」

突如、ずしんと何かが響く音が聞こえてきた。そして、俺の右端のほうから何かが来ている感じがする。

「でかい亀さんがいましたから……。」

そこには、俺の身長は楽に超えているガ ラもどきが姿を現している。しかし、顔は優しそうだ。多分……。

「こんにちはあー！」

「こんにちは！」

「……。」

小鳥と紀伊は挨拶し、俺だけはそのなかさに驚いていた。めっちゃくちゃだな、この土地は……。何食えば、こんなでかい生物が完成するんだ？

「ほら、マスターも挨拶してくださいよ。亀さんは頭下げてるんで

すよ？」

いや、その微妙な角度でそんなことを言われても困る。俺たちを見下ろしているだけではなかるうか？涎らしきものが見えるのは俺だけか？

「あゝ、お腹が空いてるみたいですねえ？この亀さんはワニっばい顔してますねえ。」

へらへらしながら笑っている小鳥を見て俺は命の危険にさらされていることに気がついた。だんだんと俺たちに近付いてきており、その口を思いつきり開けているのは容易に確認できる。

「紀伊、あの口に向かって投石！小鳥はその援助！今すぐ！奴らは俺らをいただきますする気だ！！」

「り、了解、マスター！」

「なんだか分かりませんが分かりました！」

二人とも俺の必死の叫びに何かを感じ取ったのだろうか・・・紀伊はすばやくそこいらに落ちている大きな石を亀に向かって放り投げた。口の中に滑っていった石は、亀の顎の力により、粉末タイプへとモードチェンジした。うふふ、俺が気がつくのが遅れていたら俺たちもこんな感じになってたかも・・・じよ、冗談じゃない！

「食らえ、爺さん直伝の延髄蹴りい！」

顎を閉じた亀のほっぺ辺りに蹴りをかます。しかし、亀はあっさりと首を甲羅の中に入れてしまったのでダメージの確認方法がない。

硬いな……。足が折れるかと思った。

「マスター、今のうちに逃げたらどうですか？」

「そうだな、逃げよう……。行くぞ、紀伊、小鳥！」

「了解！！」

俺たちは首を収納した亀から逃げるため、すたこらさつさと逃げ始めたのであった。

まあ、当然だ。

俺たちの目標は聖地に行くことであって、亀の餌になることではない。昨今では、ワニガメを放流したりする無責任かつ、迷惑極まりないことをしてくれる飼い主がいるが……。もしかしてこいつはそんな感じの飼い主に捨てられた結果、ここまでたくましく大きくなってしまったのではないであろうか……。いずれ、空も飛んでしまいかもれない。

「マスター、追いかけてきてます！」

「何！どうせ相手は亀だ！逃げ切るに限る！！」

俺たち三人は走って回ったのだが……。崖に追い込まれてしまった。断崖絶壁なのでここから落ちてしまえば俺たちの命は亀の餌よりも役に立たないであろう、物体になってしまうに違いない。

亀と睨み合うこと、数分……。俺はとある決断をした。

「……。紀伊、俺を亀に向かって投げるんだ。」

「な、何を言ってるんですか！マスター！そんなことしたらペロッ

と食べられてしまいますよ！」

「そうです！ペロツと食べられた拳句、ぶりつとそのまま……」
く、全く……こいつらは人の話を最後まで聞くことを発明者と
親鳥に教えられなかったのか？

「誰も食べられる気はない！俺に気を取られている間に後ろに回っ
て攻撃してくれ！」

「間に合わなかったらどうするんですか、マスター！」

「その時は……ペロリだろうな。さ、やってくれ！これは命令だ
！！」

「りよ、了解……」

紀伊は俺を抱え上げて何の感情もなしに放り投げやがった。……
・最期ぐらい、何か気のきく台詞を言ってくれてもいいんじゃない
んだろうか……。例えば、貴方の部下で嬉しかったと思いますと
かさあ……

俺は腕組みをしながら感慨深げに頷いていたが……。いざ迫って
きているかめの口を見て少々、不安になった。ま、どうにかなるだ
ろう。

俺の他力本願な願いは珍しく神様に取り上げられたのであった。
急に亀は苦しそうな顔を見ると悶え始めた。俺はその亀の鼻面に蹴
りを入れて地面に着地した。

「小鳥、助かった。」

「いいえ、当然のことをしたまでですよ、マスターさん。」

亀の後ろ側にいる小鳥のもとに向かうと、そこには亀の甲羅の中に大木を突っ込んでいる小鳥の姿があった。良い子の皆と悪戯っ子の皆、こんなことを決まては駄目だよ？危険だからね。

「さ、気絶している隙に行きましょう！」

「そうですよ、マスター！」

俺は念の為と思い、一応、大木を蹴り上げようとしたが・・・その足は甲羅へと当たり、甲羅の欠片が地面に落ちたのであった。

途端、亀の体は光りだした。俺はまたか・・・と感じながら目を閉じたのであった。さあて、どうなるのかな？

どことなく、使い捨てキャラが否めない？

二十六、

二度あることは三度ある。

これは、俺がもつとも嫌いな言葉だ。

何故かって？それはな、面白くないからだ。

まあ、可愛い女の子に話しかけられるのが三回あればいいが、人外のものとかこれ以上フレンドリーな関係になるのはよろしくないんじゃないかと俺は思う。うん、人間はやっぱり、人間と友達になるべきだ……。まあ、俺としてはそんな考えなのだが……。どんなものにも例外と鑄物が必ず存在するわけで……。俺の場合、それは相手が可愛いなら……。全てオーケーだ。

そんなこんなで、俺は光り輝いていた『元』亀に視線を移した。

「どうも、ますたー。」

にこりと俺に微笑んでくる亀を眺めて俺は心和んだ。そんな俺の頭を紀伊が叩く。

「マスター、でれでれしないでください。かつこ悪いです。」

「うるさいな、どうせ俺はかつこ悪いの。」

再び俺は天然丸出し少女を眺める。

ニコニコ笑っているような顔は別に笑っているからではない。

細目の彼女だからこんな顔なのだ。うん、たまにはこんな顔もいいなあ。まあ、身長が俺と同じぐらいなのが少しばかりポイントを下げてるけどなあ。この子の名前は紀と、^{かなめ}紀伊が付けた。俺たちのことを餌としか本当に思っていなかったらしく、聞くに以前何を食べ

たのか全く思い出せないほど何も食べていなかったらしい。

「ますたーはどこに向かっているんですか？」

「ん？俺たちは『聖地』に向かっているんだよ。」

俺は結局連れて行くこととなった紀に答えた。小鳥は疲れたのか俺の背中に負ぶさっている。紀伊は俺の左にいて、時折、きよろきよろと辺りを見渡している。

「なるほどお。なら、気をつけたほうがいいですよ？ここいらは・・・」

「マスター、なにかいますっ！！」

俺は紀伊にそう言われ、指差したほうを見やる。そこにはなんだか変なものがいた。一角獣という奴であろうか？何処かで見たことのあるような奴である。

「麒麟さんの守護範囲ですから・・・。」

「紀伊、麒麟って何？」

決して、お笑いではない。そして、俺はどちらかという動物は好きだ。何故なら、動物は人間を裏切らない。動物虐待をする輩は動物愛護法によって捕まってしまうばいなのだ。だが、動物についての知識はあるかと聞かれたらノーだ。肉食獣に近付いていつて食われてしまうかもしれない。知らないことは聞くに限る。

「マスター、麒麟とは中国で聖人の前に現れるといわれている想像

上の動物ですね。」

「流石、紀伊だな。うん、博学だ。」

「どうもありがとございます、マスター。」

まあ、ここが中国なのか知らないが……俺は思う。逃げよう。今までのことを考えれば俺たちが襲われる可能性は100%だな。

「マスター、ご命令を……。」

「紀伊は紀ちゃんを連れて逃げる!!」

「マスターは？」

「俺も逃げる!!お前らのあとを追ってな!!」

「了解!マスター!!」

俺は麒麟の横を通り抜け……先に走っていった紀伊の後を必死の形相で追いかけることにした。まあ、かけっこは得意ではないが……こうなったら焼けくそだあ!!

「マスター、言い忘れてましたが……。」

俺は何とか紀伊の隣においつくことが出来た。そして、紀伊は俺にご愁傷様といった感じの言葉を述べた。

「マスター、麒麟は騏麟とも呼ばれ、一日に千里も走るといわれています。」

「.....」

千里〓非常に遠い距離。つまり、俺たちはマラソンランナーより早い相手に無謀なかけっこを仕掛けたのだ。聞きまして、奥様？

「だ、だが麒麟も老いぬれば駄馬に驚馬に劣るって言葉もあるだろう？」

「そうですね、マスター。だけど.....」

そう、その言葉は合っているが、この場で使う必要など、ない。俺の記憶が正しければ、あの麒麟の鱗はつやつやしていたのだから.....

俺と紀伊の間を通り抜け、何かが俺たちの前に姿を現した。当然のように先ほど置き去りにしてきた麒麟である。

「.....」

その目はまるで俺たちを足の遅いカタツムリでも見るようであった。く、なんてむかつく顔だ。

「マスター、どうしますか？」

「こうなったら、俺が囷になるから.....どうにかしてくれえ！」

こうして俺と麒麟の鬼ごっこは始まったのであった。鬼は麒麟。逃げるのは俺。ルール無用で時間無制限。鬼交代なしで、更に言うなら鬼さんに捕まってしまうものはどうなるか分からない。

「……百秒数えたら追いかけてこいやあ!!」

「マスター、奮闘を期待してます……。」

「お前も走るの!!」

俺は紀伊の手をとって走り始めた。小鳥は未だに寝ているし、紀にいたっては早すぎて眼を回してしまったらしい。

「……。」

一人残った麒麟は俺の忠告でも守ってくれたのか、きっかり百秒後にその場に残像を残して消えた。

俺は足遅いの！

二十七、

俺の後ろに見えるのは残像を残しながらついてきている麒麟である。紀伊とは途中の道で別れた。

「質量を持った残像だとお！？」

俺はとある貴族の真似をしていつてみたのだが……ううん、彼の心境がどことなく、分かる気がする。

「……………」

黙ってくるのがこれまた怖い。手加減してくれているのは嬉しいだが、黙ってついてきているのでかなり恐怖がある。背中にいた小鳥は紀伊に任せた。

「そりゃあー！！」

「……………」

俺は振り向きざまに延髄蹴りをお見舞いしてみたが……お見舞いされる前に面会謝絶だった。あつという間に避けられ、残像に触れることも出来ない。ふ、動物愛護団体に捕らえられるのはどうやら俺のようだ……。

「やるじゃない！！だけど……これならどうだあー！！」

俺は近辺に落ちている石を投げまくった。ああ、やったなあ、と

あるゲームで・・・石を投げるっていうコマンドしかしてなかった
っけな・・・まあ、それはいいとして、俺は適当に石を投げた。こ
れは、どうせあたらぬのは日を見るよりも明らかなので困だ。

俺は石を投げ終わると、いつもの倍のスピードで一本道を走り続
けた。何故なら、俺たちが目指していた『聖地』まであとわずかだ
ったからだ。聖地まで、走っていけば五分という看板まで立ってい
る。つまり、無謀な鬼ごっこだったが・・・少しは俺のほうにも分
があるようだ。

「マスター、援護します！！」

「すまん、紀伊、小鳥、紀ちゃん。」

俺と同じように石を投げたり砂を投げたり、はたまた狸を投げた
りとさまざま手伝いをしてくれた三人はいつの間にか俺より先の
道に立っていた。つまり、俺の方向へと投擲してきているのだ。

「ががががががっ！！」

残像を残せるほどのスピードのない俺は彼女たちが無邪気にかつ、
俺想いの足止めたちは見事俺にヒットした。・・・全て。

最後に、狸が俺の頭にヒットし、俺はその場に片膝をついた。

「マスター、大丈夫ですか？」

「・・・いや、限界だ。あの足止めがなければよかつたんだが・・・」

最後の狸は効いたな・・・。それに、お遊びも飽きたのか麒麟が
その角を俺の心に向けている。一度、女の子からしてもらいたい仕

草だなあ。

突進してきた麒麟を避ける力も残っていない。

「危ない、マスター!!」

「紀伊!!」

「.....!!」

俺と麒麟の間に紀伊が割り込んできた。誰にも、麒麟と紀伊の接触を防げないと思われたが・・・俺だけが紀伊を守ることが出来た。そして、俺は紀伊を助けることとなった。

「マスター、やっぱり怖いです!!」

「なに!!」

紀伊は俺を掴んで麒麟へと放り投げた。勿論、空中から串刺しにしようとしていた麒麟は避けることなどできず、本来の目的・・・つまり、俺を刺すことに成功したのであった。

「ぐふう!!」

ああ、なんだか・・・意識が遠のいてきた。ふ、女の子を守って死ぬるなら本望だぜ・・・まあ、どちらかというと無駄だったよ。うな感じが否めないのだが。

「マスター!!」

近寄ってきてくれた紀伊だが、その前に病院にでも連れて行って

もらいたい。

「笑ってください、マスター！！ほら、私が今からギャグを言いますから！マスター、この小説にはもう、あきマスター（あきました）」

「……………」

パト ッシユ、僕はもう疲れたよ。色々…………。こうして俺はその場で意識を失ったのであった。

「……………ん？」

「あ、輝さんが目を覚ましました！！」

「紀伊か？と思ったが、俺の隣にいたのは目を真っ赤にした葵だった。その隣には加奈と碧さんがいる。」

「…………俺はどうしてたんだろ？」

「輝さんはおばあさんの剣に刺されたんですよ。」

「ああ、思い出した。そういう俺は刺されたんだった。いやあ、痛かったなあ。どうやら、こちらの体の受け入れが完了したみたいだな。」

「輝さん、『聖地』には行って来ました？」

「いえ、まだです…………もう少しでいけたんですけど…………途中、ギャグに殺されました。」

頭にはてなマークを浮かべる三人に俺は曖昧な笑いを残して俺はベッドから抜き出ようとしたが……。

「ぐう！！」

麒麟に刺された箇所にはそれらしき傷が残っており、俺はちょっと嫌な感じになった。く、あのギャグの恐ろしさが再び戻ってくるぜ……。

「輝さん、大丈夫ですか？」

俺は首を振って再びベッドへと体を移して俺を追い詰めたギャグを思い出した。

龍と書いてなんと呼ぶ？ ~他多数~

どこと無く、シリアスな話？（前書き）

今回はギャグが少ないです。

どこと無く、シリアスな話？」

二十八、

俺がもう一步で戻ってきてしまった『聖地』の事だが……その夜、ベッドで読書をしていた俺のところに碧さんがやってきたのであった。

「輝君、向こうで誰かに会った？」

「いえ……機械や鳥やら亀やら麒麟などには会いましたが？」

俺がそう答えると、碧さんは思案顔になって俺のところに近付いてきた。その目は濡れているような感じがしないでもないような気がしないでもないような……。

「……輝君、ちょっと目をつぶってくれないかな？」

「はあ、わかりました。」

俺は不安になりながら目を閉じた。すると、唇に何か触れたような感じがし、瞬く間に眠くなっていたのであった。俺は睡魔に勝つ事無く、意識をどこかに飛ばしたのであった。

「輝君……輝君……。」

「ん……？」

目を覚ますと、俺は地面に倒れているような状態であった。近くには碧さんが座って俺を起こしてくれている。

「1111は・・・？」

「ここ？ここは輝君が『聖地』に行く途中であつちに戻った最後の場所よ。」

。地面を見ると赤く染まっている。俺の血だ。良かった、赤色で・
昆虫は緑だったかな？

「でも・・・なんで碧さんがいるんですか？」

俺は不思議に思ったことを口にした。こちらで龍を見たことはあまりない。

「それはね、ひ・み・つ！！」

そう、年上のお姉さんから言われてしまえば俺は何も聞くことが出来ない。俺はとりあえず聞いた紀伊達の姿を探してみたが、ここにもいなかった。

「今頃紀伊ちゃんたちは貴方のおじいさんの場所へ言ってるわ。麒麟を連れてね・・・。」

「へえ、会ったんですか？」

「まあね。さ、そろそろ行くところか？」

俺は碧さんに連れられて目前として涙を流した『聖地』へとたどり着いたのだが・・・。

「祠がありませんね？」

「まあ、聖なる地だからね。ま、しょうがないわ。」

「一見、小さな祠であったが・・・祠を開けるとそこには井戸があった。」

「隠し通路よ。この地下に行けば分かるわ。」

「何がですか？」

「貴方の全て・・・。」

碧さんはそう言った。俺は頷き、井戸の下に続く梯子へと手を掛けた。そして、碧さんはおりてこないのかと聞いたのだが・・・。

「ごめん、私は・・・いけないのよ。」

そう言われたので俺は一人で梯子を降りた。

地下に降り立つと、そこは闇の中ながらも何があるか確認できた。そこには大きな水溜り・・・もとい、地底湖が限りなく広がっている。それ自体はどうってことないのだが・・・。

しゅーしゅーしゅーしゅー

その地底湖の中には何かが動いているのが確認できる。そこは、未知の世界で人が絶対にいつてはならない領域とでもいっておけばいいのだろうか？まあ、俺が来ている時点で大丈夫だ。

『・・・生贄となりし者か？』

龍と書いてなんと呼ぶ？ ~他多数~

「・・・え？」

生贄だと？生贄ってあれだろ、ほら・・・神様の餌って奴？
水面に移る巨大な影には二つの赤い目があり、それは俺を見ている。その大きさは計り知れず。多分、この地底湖全体に体を伸ばしているに違いない。

『生贄よ、我の存在を知っておるか？』

「さあ？わかりませんが・・・？」

『我は龍の原種だ。遠い、過去に生まれしものだ。今は存在するだけでこの世界のバランスをまるで二股が彼女にばれた男の心境にしてしまうのだ。』

つまり、存在すればそれだけでこの世界に天変地異にしてしまう
というのが。

「それで、俺が生贄って何ですか？」

『私の力を抑えるためにお前が生贄に選ばれたのだ。・・・お前の過去は見せてもらった。竜と書いてドラゴンと呼ぶからもみせてもらった。』

「・・・それはどうも。」

『何故、自分がこうにも人外のものに会うかわかっておるか？』

俺は首を振った。

「それはな、お前は人類からの生贄だからだ。生贄という、お前の存在は大きい。小さき頃から幻影の龍を自ら作り出して、更に、その後実際に会った龍たちの力を奪い去った。これはなかなか出来ないことだ。さらに、言わせてもらうが・・・おまえ自身にも少なからず龍の血が混じっている・・・気がしないでもない。」

どっちだよ。

「つまり、お前の体は最高の力がつまっている食べ物。人外達の好物なのだ。だが、お前はもはや誰にも襲われないだろうな。何故ならここで・・・食われてしまうのだからな。この、龍の原種である・・・私にな。まあ、お前を食らうまでには少々、時間がある。話をしよう。」

龍と書いてなんと呼ぶ？ ~他多数~

俺の終わりが近いか？ (前書き)

もう少しで輝の物語も終わりです。

俺の終わりが近いか？

二十九、

「あの、貴方の名前はなんていうんですか？」

『さあな。私の名前など、不明だ。そうだ、最後の機会に教えておくがお前が会ったあの三匹の守護者たちは私の妄想だ。』

「いなかったってことですか？」

『ちよつと違うな。確かにいた。現にお前の記憶には未だにいるだろう……。』

「ええ、います。」

『忘れなければ思い出は何時までも傍に居てくれる……。だが、それは所詮、思い出だ。お前が居て欲しいと思えば思うほど……。苦しみは増える。まあ、そんなくらい話はおいておいて少しばかり面白い話をしてやろう。』

「？」

『私は男と思うか？』

「いえ、女じゃないんですか？」

『当たり前だ。何故、そう思う？』

「……母なる海って言うし……。まあ、これまで人以外のもの

にあつたときは全て女の子だったし……。」

『まあ、いいだろう。ならば、私が人型のときの姿を見せてやろうか？』

「ええ、冥土の土産に見せてください。」

『良からう。ちょっと待っておれ……』

「……………」

『どうだ、この姿は？私の人型のときの姿だ。』

「つて、メイド服じゃないですか！何ですか！」

『それはな、お前の妄想が作り出した龍……穂乃香を通じて知つたのだ。それ以降、私はメイドになってみたいと思っていたのだ。どうだ？似合っているか？』

「ええ、確かに似合っているとは思いますが……後ろの地底湖 凄いいことになってませんか？」

『そうだな、今ではほとんど水はないだろうな……まあ、泳いでみれば分かるが未だに物凄い広さだ。また、私が元の姿に戻れば水かさは今の比ではない。ところで、お前の名はなんと言う？最後に聞かせてくれ……』

「……………白川 輝です。」

『そうか輝と言うのか。……輝……悪いがお前をおいしくいた

「だかせてもらおう。」

「……………」

『…輝、何故抵抗をしない？これまでのお前だったら大半が抵抗をしてきたはずだが？』

「まあ、綺麗なメイドさんに襲われるならしょうがないと思ったんですよ。それに、俺を待っている家族なんて一人も居ないんですよ。へへ、卑屈になってすいません。飯がまずくなりますよね？」

『そういうわけでもなさそうぞ？ほら、お前が言う家族の定理は何だ？』

「血が繋がっている事ですか？」

『私が思うには心が通じ合っているものたちのことだ。輝にはこの声が聞こえないのか？』

「あ…さあ…!!！」

「…きらあ!!！」

「…なさい、あき…!!！」

「…これは…皆の声？」

『そうだ。お前の事を心配してきたお前の家族たちだ。あの娘達はお前と同じような境遇だろう。元来、龍はお前たちの世界に居ない。そんなあいつらはお前を求めるようにお前の元へと現れたのだ。輝、

お前が返事をしてやらねば皆は悲しむだろう……。』

「だけど、貴女は！？貴女の事はどうするのですか？」

『私は……。私が求めるものを待ち続けるさ。もとより、私がここにいる理由はその求めるものを待っているのだ。姿はどうであれ、私は何を求めているのかも分からないものを待っているのだ。ほら、早くしないとそろそろ私の気が変わるかも知れんぞ？』

「……。わかりました。それと、ありがとうございます。」

『何、当然の事をしたまでだ。だがな、輝……。実際のところ……。私にはその力は戻っていないのだ。』

「！？どういう意味ですか？」

『成績というものはたしてわるものだ。強き力を持つ我と、生贄としてやってきたものの力を足して二で割ってきたのだ。それを続けてきて、とうとう、割り切れなくなってきたようだ。だが、もう少しの間だけは……。待ち続けていたい。輝に、言いたいの私の事を覚えていて欲しいのだ。』

「……。貴女の事は忘れません。失礼します。」

『お前が、お前の両親のようにあってよかったよ。お前なら、私の事を覚えておいてくれるだろう……。ほら、ロープが降りてきたぞ……。闇の中にはな、光があるものだ。その逆もある。輝、私もお前の事は忘れない。』

俺はロープを掴んだ。すると、上に居る三人がロープを掴んで引

っ張りあげているのか知らないが……体が浮上していつていることに気がついた。メイド姿の龍の原種の姿は段々と小さくなっている。

俺は井戸の外へと上げられた。

そこには、三人が笑顔が確かにあった……。

俺は、このことを忘れたくないと思いつながらも……闇を忘れたいと思っていた。しかし、俺は龍の原種と約束をしたのだ。この約束だけは絶対に守りたいと思う。まあ、これからどうなるかは分からないのだが……俺としては俺を頼ってきてくれたのか知らないがこの三人の龍達と仲良くやって生きていきたいと思う。

「ところで、輝はここから帰る方法を知ってるの」

加奈が告げる、俺たちは揃って首を振った。まあ、今は幸せだ。それは言える。

猫の言葉はわからない

三十、

帰りたい、帰れない。いや、正確に言うとは帰る方法がわからない。そんな経験ないであろうか？例えるのなら、くるくる回転ドアに入ってしまった・・・出ようとするがタイミングをなかなか見出せない。そんな感じだ。そして、俺・・・いや、俺たちはそのような状況に陥っていたのであった。

「あゝ、困ったなあ。」

「輝さん、全然困っている感じがしてませんよ？」

「そうだ、もう少し困ったような感じになったほうがいいんじゃないのか？」

「まあ、言っても始まりませんし・・・輝君、とりあえずお爺さんがいるところへ行きませんか？」

最年長者の一声により、俺たちは行動を開始したのであった。

「よお、輝・・・。」

爺さんは既に包帯を取っておりその顔には無数の傷が残っている。まあ、見た目的には元気そうであり、既に死んでいるといっても過言ではない気がしてならないが・・・ここはスルーするのが基本だと俺は思う。

「爺さん、あつちに戻れなくなっている気がするんだが・・・戻る

方法ないのか？」

葵達はここにはいない。俺としてはこの爺さんが葵達にちょっとか
いを出す可能性が非常に高く、更に、それを笑いの種にしてしま
うとわかっていいるからだ。

「そうじゃのう・・・ちょっと玄さんに聞いてくるから待っておね。
」

玄さん・・・？誰だろうか、それは・・・俺も結構こっちに来てい
たのだが・・・初めて聞く名前だな・・・。

「爺さん、玄さんって誰？」

「玄さんはな・・・まあ、言うなれば大工の棟梁じゃ。がさつな性
格で一本気・・・そうじゃのう、典型的な頑固親父じゃ。」

しみじみ頷く爺さんを見ていて俺は簡単にその玄さんの顔があり
ありと浮かぶようであったが・・・。

「お、玄さんじゃ。」

そこにいたのは黒猫であった。頭に鉢巻をしているのがいかにも
大工の棟梁のようだ・・・まてまてまてい！！

「爺さん、これが玄さんか！？」

頷く爺さん。

「そうじゃ。これぞ、大工の棟梁、玄さんじゃ。姿こそ、猫じゃが

龍と書いてなんと呼ぶ？ ~他多数~

な。
「

「にゃん。」

おいおい、今、めちやくちや猫みたいな鳴き声発したじゃねえか？
？本当にこの猫は頼りになる偉人さんなのだろうか？

「さて、ちょっと玄さんに聞いてみるかのう……。」

そういつて爺さんが取り出したのはどこからどう見ても猫語翻訳機械であった。

俺の物語の結末！

三十一、

「玄さん、何故、輝たちはあちらの世界に戻ることが出来ないのじやろうか？」

「にゃくん、にゃ、にゃーん。」

「成る程……。」

爺さんと猫は先程からずっとこんな調子だ。俺にはさっぱりわからん。……いや、きつと爺さんにもわかつていないと思われる。先程から必死になって機械を眺めているからな……。

俺はこれからどうしたらいいのか考えていると、話し終わったのか爺さんは台所へと姿を消し、猫缶を持ってきた。そして、それを猫の前に置く。

だが、猫はその餌を拒否。

「ああ、玄さんは煮干派じゃったな。すまん、わすれとったわ。」

成る程、これが頑固なところか？かなり粹な目をしている猫だ……。

猫が煮干を食べ始め……俺は爺さんからのようにしたらあっちの世界に戻るか聞いてみた。

「簡単じゃ。一人、犠牲になればよい。世の中、ギブアンドテイクじゃ。まあ、犠牲といっても帰るのがちょっと遅くなるだけじゃ。」

「そうか……なら、俺が犠牲になろう。」

俺を追ってきてくれた皆のためだ。それに、ちょっと帰るのが遅くなるだけなら構わない。今更、そんなことを言っている場合でもない。猫に何をされるか分かったものでないが、ここは、大人しくしておこう。家族のために……。

「なら、あちらの世界に戻したい連中を玄さんのところに連れてくるんじゃない。ほれ、玄さんが機嫌のいいうちにな？」

「わかった。」

俺は三人を連れて黒猫の前に姿を現した。猫は粹な座り方をしており（なんとなくだ。なんとなく、そんな感じに見えるだけだ。）いつでもどろどろといったところであった。

「本当に、輝さんは戻ってくるんですね？」

「ああ、本当だ。」

「嘘じゃないよね？」

「大丈夫だ。」

「帰ってきてくださいね？」

「ぜひとも、帰らせてもらいます。」

俺は三人にそういつて別れた。猫は三人の前を歩いていき、道場のほうへと姿を消した。そんな、三人の後ろへと向かって俺は叫ぶ。

「……また、いつかな……俺は、お前たちの事を忘れない
!！」

三人が驚いて振り返ったような気がしたが……爺さんが際どい
ところで扉を閉めてしまった。

「輝、何も焦ることなんてない。」

「だけど……そうだな、俺が間違ってた。ちよつと帰るのが遅
くなるだけ出いな。」

俺は猫が食べ残していった煮干を口に運んで何かを飲み込んだ。

それから、数日後……。

葵は青空を眺めて溜息をついた。そこは、彼女が輝とであった初
めの場所であった。今日は少々遅い、夏祭りがある日であった。

「輝さん……。」

葵は溜息混じりに視線をそらし、そろそろ帰ろうかと立ち上がっ
たのであった。そこへ、加奈と碧が二人してやってきた。

「葵さん、どうかしたの？」

加奈は思いつめたような顔をしている葵へと声を掛けた。彼女は
毎日のように学校が終わったら部活にも行かず、この場所へと足を
運んでは夏なのにザリガニを探したりしていたのであった。

「……いえ、なんでもありません。加奈ちゃん、碧さん、輝さん
は帰ってくると思いますか？」

その質問に、二人は顔を曇らせた。

「帰ってくる・・・よ。だって、帰ってくるっていったもん。」

「そうですねえ、帰ってくるといいですね。」

二人ともはっきりしたことは言えない。何故なら、三人と輝が別れる時、なんとなく、もう会えないんじゃないかといった感じを覚えたからであった。

「・・・そうですね、まだ、分かりませんよね？」

「気長に待ちましょう。きっと、どうにかしますよ、輝君なら・・・」

「そうだよね、輝なら、どうにかするよね？」

「ま、俺なら帰ってきてるんだけどな。どうにも、こづいづのはちよつと苦手で・・・タイミングが分からんね。」

「そうですね・・・ちよつと、気恥ずかしいですね？」

「うん。」

「そうですね。」

「」「」「」「」

視線は輝へと注がれていき・・・視線が集まってしまっていた

輝はどうかしたのかといった感じで三人を見比べた。

「あ、そういえばまだ言っていなかったな。ただいま、みんな。」

「「「おかえりなさい！！」「」」

青空の下、輝は家族たちに抱きしめられてこちらに戻ってこられたことを何処かの誰かに感謝した。これまでの事を思い出し、やっぱり、帰ってこなかったほうがいいかもしれないとちょっとだけ思ったのは気の迷いかもしれない。かくして、輝は家族と一緒に祭りへと出かける準備をしたのであった。く輝編 完く

俺の物語の結末！（後書き）

さて、どうだったでしょうか？おもしろかったでしょうか？これで輝の物語も一段落つきました。これも、皆様のお陰です。

龍と書いてなんと呼ぶ？ ~他多数~

龍と書いてなんと呼ぶ？ ~他多数~

葵（前書き）

三種類の終わりを作ってみました。内容はそれぞれ違います。

葵

おまけ〜葵〜

あれから、数時間後・・・俺は皆とはぐれて迷子となってしまう。めったにこんなお祭りに来ないし、その昔、財布をすられたこともあるのでできれば人ごみは勘弁してもらいたいのだ。まあ、こんな感じで俺は一人、ふらふらと人ごみの中をまるでくらげみたいに歩き回っていたのだった。

「・・・はあ、皆どこ行ったんだ？」

俺は一人射的の前で時間を潰すことにした。時間がたって人も少なくなれば会う機会が増えるに違いない。

「おじさん、チャレンジするよ。」

「あいよ。」

俺は射的のおじさんから銃を渡され、品定めをする。

「さて、どれをねらうかねえ。」

上のほうにはゲーム機が置かれており、こんな銃でどうやって落とすのだと聞きたい。いや、落ちないだろうなあ。なら、下のほうのお菓子でも狙ってみるか・・・。

「せりや。」

狙った獲物とは違うものが獲れた。なんだ、この変なぬいぐるみ

は？赤い、バルタ 星人か？

「あ、いたいたあ！！輝さん、何してるんですか！皆心配してますよ？」

「葵！！いやあ、よかったよかった。迷子になってたんだよ。」

「言われなくても分かりますよ。」

そして、今度は俺の手元に居る赤い物体を眺める。目から、『お母さん、これ欲しいよお。』光線が出ている。まあ、あれだな・・・葵には色々世話になっているし、たまたま取れてしまったものだ。やっても構わないだろう。

「葵、プレゼントだ。」

「え、いいんですか？こんな可愛いのもらって？」

あいにくだが、これを可愛いといえるのはお前ぐらいだろうよ。俺には一ミリも必要ない。

「ありがとうございます。」

そんなに嬉しかったのだろうか？葵は終始、ニコニコ顔であった。

「さてと、なら・・・もうちょっとだけ弾が残っているから全部使い切るか。」

俺は残りの弾を一番重たそうなゲーム機に向けて連続発射した。

「坊主、またチャレンジしてくれよ？」

「……まあ、今度はもうちょっと軽いゲーム機でもおいといてくれると嬉しいですね。」

俺は、葵と手を繋いでその射的屋を離れた。何故かって？まあ、当然のようにゲーム機は手に入らなかったからさ。

「葵、皆はどこだ？」

「え、あっちじゃないんですか？」

適当な方向を指差す。

「……もしかしてだが、お前は集合場所を知らないのか？」

「いいえ、確か……あっちの方向ですよ。」

そして、先程とは違う方向を指差す。

「どっちなんだ？」

「迷子の子が泣いていたところで落ち合うようにしていたんです。」

俺たちの前を泣いている男の子が母親の手につながれて歩いていった。

「マー君、お母さんの手を離しちゃ駄目よ？迷子になるからね？」

「うん。」

こうして、迷子は二人になってしまった。やれやれだぜ。
その後、俺と葵は二人でゲーム機を落とすために所持金のほとんどを射的屋に使い込んだのであった。

「葵、なかなか二人とも迎えにきてくれないな？」

「そうですね。」

こうして、俺はその日の祭りをほとんど無意味に過ごしてしまったのである。

結局、俺と葵の両名は祭りが終わりを告げるまでその場いた。二人とも先に帰っているだろうと思って俺は葵の手を握って家に帰ることにした。

「葵、手を……離すなよ？」

「輝さんこそ……きちんと手を繋いでないとすぐに何処かに消えますからね……。これから先は、私がきちんと貴方の手を握りますよ。」

「へ、俺は子どもじゃないってのー！」

俺と葵は二人して暗くなった帰り道を歩いて帰ったのであった。

（葵エンド）

龍と書いてなんと呼ぶ？ ~他多数~

加奈（前書き）

三種類の終わりを作ってみました。内容はそれぞれ違います。

加奈

おまけく加奈く

あれから、数時間後・・・俺は迷子となつてしまった加奈を探す羽目になつてしまったのであつた。少し、目を放してしまつた隙に何処かに消えてしまつたのだ。葵たちとは射的屋の前で三十分後に待ち合わせをしている。

「・・・どこ行つたんだ？」

俺は人ごみを掻き分けて探す。全く、迷子になるなんておこちゃまだな。俺が小さい頃はな、そのく何だ、迷子なんて多分、なかつたぞ？

「・・・加奈く、どこにいるのかなあ？」

まあ、なかなか見つからないな。ちよつと、不安だ。もしかして・・・誘拐か？身代金か？

「ねえ、お嬢ちゃん、一緒に祭りまわらない？」

そんな時、不良グループの一角と思われる連中が少女を誘つている場面に出くわした。

「無理よ！私はちよつと迷子なの！」

ううむ、そのお嬢さんも気丈に自分が迷子だと訴えている。おいおい、自分から迷子つて言うのもどうかと思うがね？何処かで聞いたことのある声だな？

「なら、探してあげるよ。ほら・・・」

男が手を伸ばした先には加奈が居た。加奈はどうやら俺の顔を見つけたようだ。

「お兄ちゃん！」

「お兄ちゃん!？」

加奈は走りよってきて俺に引つ付いた。

「なんでえ、家族できてんのかよ？しけてやがらあ。」

どこの不良だ、お前は。まあ、不良は次の獲物を探しに消えてしまった。

「加奈、ちゃんと葵の手をつないでいろって言ったじゃないか？」

俺はこの芝居上手ながきんちよを叱る事にした。

「だって・・・」

「だっては言い訳!!」

黙りこむ加奈。ちよつと言い過ぎたのかもしれない。ま、まあ・・・
・ここらじゃあれだ、なんだか近くの人の視線がかなり痛いのでそろそろ許してやったほうがよさそうだ。

「まあ、何事もなかったから俺も探してよかったよ。ほら、泣くん

龍と書いてなんと呼ぶ？ ~他多数~

じゃない。」

俺は泣いている加奈の手を引っ張って歩かせることにした。急いで何とかしないと警察が来てしまいそうだ

「ほら、りんご飴買ってやるから泣くなって。」

「う……ん。」

近くからはなんだか非難の声が聞こえてくる。

「物で誘ってるよ……。」

そんな声が聞こえてきている。ふ、しょうがないじゃないか。だって、俺はどうしたらいいのかさっぱり分からないんだもん。ここは急いで葵たちの元へと行かなくては……。

「加奈、葵たちのところへ行くぞ？」

「ちょっと待って……輝、足怪我してるからおんぶしてくれないかな？」

いつもは小生意気なところのある加奈がそんなことを言っている。まあ、たまにならいいか。

「大丈夫か？」

「うん。輝、ごめんね？」

「何がだ？」

「迷子になったこと・・・まだ、怒ってるよね？」

俺はどう答えたものかと悩んだが、一つの結論を出した。

「まあ、迷子はよくあることだ。気にするな。」

後ろのほうだから加奈がどんな顔をしているのかは分からない。

「ありがとう、お兄ちゃん。」

「何か言ったか？」

「・・・別に。」

加奈はそれまで出来るだけ俺に体重を掛けないように努力していたのか、急に体重を掛けてきた。

俺は、途中、加奈が何かを言ったような気がしたが・・・聞き取れることは出来なかった。

「輝・・・お兄ちゃん、ずっと、一緒だよ。」

（加奈エンド）

龍と書いてなんと呼ぶ？ ~他多数~

碧（前書き）

三種類の終わりを作ってみました。内容はそれぞれ違います。

碧

おまけ〜碧〜

あれから、数時間後・・・俺はそろそろ集合時間へと近付いていることに気がついた。今回の祭りは、それぞれ好きなことをするということではらばらに行動していたのだ。

「さて、そろそろ・・・皆が待ってるかな？」

「お〜い、輝君!!」

あちらのほうに居るのは碧さんの様だ。両手に食べられるのかと聞きたいくらいの大量の食べ物握られている。

「皆はまだですか？」

「ええ、さつき二人にたまたま会ったけど、葵ちゃんは射的に夢中で、加奈ちゃんは不良を倒していたの。」

どうやら、他の二人が来るのは本当に後になりそうだ。まあ、あの二人の事だから大丈夫とは思うが・・・まさか、そこいらの人を襲って食べるってわけでもないだろう。

「私もね、途中おいしそうな人がいたんだけど、これ買って我慢したの。」

「・・・・・・・・」

忘れていた。碧さんが人にかじりつく癖があったのを・・・当初、

俺も噛み疲れた記憶が生々しく覚えている。まあ、今日は色々食べてるから大丈夫であろうが……。

「輝君、ちよつと何か食べに行かない？」

「え、ええ……いいですよ。」

俺は世界が平和になる選択肢をえらだつもりだ。もしも、ここで拒絶していたら俺が食われる。それは断固として拒否したい。

「うふふ、デートね？」

「そうですね？久しぶりのような感じがします。」

俺は碧さんとくつついて歩き、色々な屋台の食べ物総なめにしていくなにした。ぶっちゃけ、俺としては二件目のたい焼きでギブアップだ。

「ほりゃ、はへない？」

「何を言ってるか分かりませんよ。それに、これ、食べないって言うてるのならいりません。少々、食べ過ぎましたから……。」

「ほ……。」

ああ、俺はいつの間にかこの人が何かを口の中に入れていても何を言いたいのかわかるようになってしまった……まあ、いいことなんだろうな。

「輝君、この前は騙すような感じで『聖地』に連れて行ってごめん

なさいね？私がどれだけ謝っても償えないことだと思ってるの。」

俺はポツリとそんなことを言った碧さんの悲しそうな横顔を眺めた。嘘をついているとは到底思えない顔である。まあ、俺の目がおかしいだけかもしれないがね。

「いいですよ。例え、騙されていても俺は碧さんに騙されるなら本望です。」

「……ありがとう、輝君。」

俺は、少し元気になった碧さんの顔を見ただけで嬉しかった。誰にでも、嬉しそうな顔は似合う。嬉しい顔を偽らなくてはいけない人は俺から見たら悲しいのだからと思う。

「さ、そろそろ戻ろうか？」

「そうですね。」

「帰ったら勉強ね？」

「うぐ、そ、そうですね……。」

俺は綺麗な横顔の碧さんをちらりと見た。

「あ……。」

「あ……。」

目が合った。碧さんの頬が赤く染まる。

「輝君、何を見てるのかな？」

「碧さんの顔です。綺麗ですよ、その嬉しそうな顔。」

俺は碧さんの照れ隠しのはたき攻撃をすんでのところで避けた。ふ、流石に碧さんのお願いでまあびんたを食らったら立ち上がれなくなるかも知れんぜ。

「こら、避けるな！」

「危ないですって!!！」

「年上のお姉さんを馬鹿にすると許さないわよ？」

俺は碧さんより先に二人が待っている場所へと駆け出した。俺の後に碧さんが続く。

「輝君、もう、私を置いていかないでね？」

「碧 エンド」

龍と書いてなんと呼ぶ？ ~他多数~

本気で終わり！！皆様ありがとうございました！！（前書き）

終わり終わりと言ってきましたが、今回でおわりとなります。

本気で終わり！！皆様ありがとうございました！！

おまけ 謎探偵 葵

今日も、探偵のもとに依頼が来る。

「葵さん、依頼ですよ。」

「本当だな、輝君？また、ペット搜索か？それとも、ストーカーを搜索するのか？」

半ば、うんざりした調子で新聞を閉じて助手の輝を見やる。

「いえ、今日は下着泥棒を逮捕することです。」

「そう？ま、しょうがないから向かいましょう。輝君、車を出して。」

「わかりました。」

助手は

「なんで俺が助手なんだ」

と呟きながら外に出て行った。探偵はコートを着て外に出る。やってきた年代物の車に乗り込み、運転席に居る助手にどのような状況でどれほど盗まれたのかを尋ねた。

「深夜二時くらいですかね？依頼者の加奈さんが物音がしたのでベランダのほうへ向かうと、そこに頭からパンツをかぶった怪しい人物がいたそうです。びっくりしている隙に二階から飛び降りたみたいですね・・・依頼者の加奈さんも度胸があるのか知りませんが、

龍と書いてなんと呼ぶ？ ~他多数~

二階から飛び降りて犯人を追いかけています。そこで、四人の容疑者まで絞り込んだそうです。」

「四人まで絞り込んだのなら、別に私を呼ばなくていいんじゃない？警察にでも頼んでくださいな。」

「まあまあ、そうしないと話が進まないですよ。」

不満を隠そうともしない探偵をなだめながら助手は依頼者と容疑者四人が居る待ち合わせ場所へと車を走らせたのであった。

「はあ、俺が探偵やりてえよ。」

「何か言った？」

「何も言ってますせん。」

場所は依頼者の部屋で、容疑者の方々は大人しく揃っていた。

「まず、一人目の容疑者が黒河 暗ですね・・・お坊ちやまです。」

被害者との接点は同じ会社に勤めている社長と秘書という関係です。」

「次。」

「次は、隣室の碧さんですね・・・隣人さんとはよく、話をしているそうです。ただ、ちよつと碧さんは変わった趣味をお持ちだとか・

・・・」

「成る程、次。」

「次は、ザリガニ星人さんですね。地球には、観光にきていたみたいですよ。その日はこのマンションの上に飛行船を着陸させて降りていたそうです。」

「おいしそうね、後で後ろから襲うわよ。最後は？」

「このマンションの管理人さんです。名前はわかりません……戸籍抹消されているようです……爺さんと呼ばれています。」

全ての容疑者の紹介が終わり、今度は依頼者からの詳しい話を聞く。

「そうね、ちょっとびっくりしたから後れを取ったけど……（中略）……とりあえず、この人数までには絞り込むことが出来たわ。」

探偵と助手は話し合った。

「まず、ザリガニ星人ではないわね。あんなはさみで下着を掴んだら切れちゃうし？」

「そうですね？」

「それに、この物語でこんなことをするのは決まっていなかったかしら？」

二人は何かをぶつぶつ言っている爺さんの下へと静かに近づく。

「……ばれませんようにばれませんようにばれませんようにばれませんように……」

「犯人はあ、おまえだあ！！」

探偵の蹴りが見事爺さんを捕らえたかのように思えた。だが、爺さんはまるで強風に飛ばされるような葉のように見事その攻撃を受け流した。

「ふふ、おぬし、なかなかやるな？わしがぶりていーなばんていーを盗んだ犯人だと気づくとはな？」

「いや、あんた以外は無理だろ。」

助手はさりげなく呟く。

「じゃが、それもここまで・・・さらばじゃ、お主ら！！わしについてこれるかな。」

爺さんは文字通り、無茶なことをやってのけた。その場にガクリと倒れてしまい、なんだか、背中辺りからエンジェル・ウイングを出現させて天に昇っていった。

「く、まんまと逃がしたわね？しかし、今度はそううまくいかないと思いなさい！」

「いや、根本的に無理でしょう？」

俺はなんだか、嫌な夢を見ていたようだ。いや、しかし・・・かなり現実的な夢だった。

「輝さん、おはようございます。」

「輝、起きるの遅いよ?」

「輝君は低血圧ですねえ。」

俺のベッドの周りに三人はそれぞれ立っており、よく似合うエプロン姿で俺を覗き込んでいる。ちよいと、寝過ごしてしまったようだ。

「輝さん、今度、探偵映画見に行きませんか？四枚、チケットもらったんです。」

その申し出に、俺はなんだか悪寒を覚えたが、黙って頷くことにした。ま、まあ・・・俺の予想は裏切られないだろうな？だが、俺は後でそのことに気づいたのであった。『龍と書いてなんと呼ぶ?』終

本気で終わり！！皆様ありがとうございました！！（後書き）

え、本当に今回で終わりを迎えました、『龍と書いてなんと呼ぶ？』。最後まで続けられたのは皆さんのおかげです。今後のことはほとんど決めてませんが、そろそろ、話に終わりをむかえそうな小説から書いていきたいと思います。続編は考えてませんが、この小説が人気があったのなら、書きたいと思います。最後ですが、評価してくださいました皆様、本当にありがとうございます。中には、メッセーじまでくれたかたもあり、うれしかったので一応、書いておきます。また、どこかで合いましょう！！

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2523b/>

龍と書いてなんと呼ぶ？ ~他多数~

2008年11月7日07時24分発行